

白猫プロジェクト～賢
者と黒竜を従えし者と
冒険者達の学び舎～

片倉政実

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「さあ……学園生活の始まりだ！」

大いなるルーンを探す旅の最中、冒険家を養成するための学園に通うことになったりオス達。

そんなりオス達が様々なクラスメート達や転入生達と共に織り成す、波瀾万丈な学園生活が今始まる！

※この作品は「白猫プロジェクト〜賢者と黒竜を従えし者〜」の外伝にあたる作品です。

オリジナル主人公等については、上記の本編を参照して頂けるとありがたいです。

※この作品は原作の茶熊学園イベントを元にした作品となっておりますが、多少作者によるオリジナル要素や独自解釈も含まれていますが、その点についてはご容赦願います。

目次

プロローグ ようこそ、茶熊学園へ！

1

第1章 茶熊学園1年時

第1話 桜色の春と転入生 | 22

第2話 部活動見学く文化部編

46

第3話 部活動見学く運動部編+α

64

第4話 創部準備と新入部員 | 99

第5話 強いられる学びと悩める学徒

121

プロローグ ようこそ、茶熊学園へ!

ある日の事、俺達はいつものようにギルドから受けた依頼をこなした後、アジトなどがある飛行島へと戻ってきた。

(ふう……しかし今回の依頼は中々骨が折れる内容だったなあ……)

額の汗を拭いながらこなしてきた依頼の事を思い出していると、キヤトラがアイリスの腕の中のため息をついた。

「はあ……それにしても今日は疲れたわねえ……」

「(だなあ……つたく、あんなに魔物が多いなんて話、聞いてねえつての……)」

キヤトラの言葉を聞くと、黒竜のネロが領きながら少し不機嫌そうに答えた。すると、ナギアが小さく笑いながらキヤトラ達に話し掛けた。

「まあ……キヤトラ達の言う通り、魔物達の相手でかなり疲れたけどさ。今日俺達が魔物達を倒したことで、あの島の人達が助かったわけだし、頑張った甲斐はあったと思うぜ?」

ナギアの言葉を聞いた後、キヤトラとネロは顔を見合わせながら、静かな声で話し始

めた。

「うーん……まあ、そう言われればたしかに……」

「(そうかも……しれねえな)」

「うん。それにそう考えた方が、何か楽しい気がしてきたしね♪」

「(ははっ、だな!)」

そしてキャトラとネロがさつきまでの様子とは打って変わって楽しそうに笑い始めると、ナギアも一緒になって笑い始めた。

その様子を見て、俺とアイリスも顔を見合わせた後、静かに微笑んだ。

(やっぱりナギアは凄いな……どんな相手でもいつの間にか自分のペースに巻き込んで、そして最後には笑顔にしてしまう。例え、他のことでナギアに勝てたとしても、これだけはいつまでも勝てる気がしないな……)

ナギア達を見ながら、心の中で静かにそう思っていると、突然ぐくつ、という音が辺りに鳴り響いた。

(……今、ナギアの方から聞こえた気がするけど、この音はもしかして……)

俺達が一斉にナギアの方へ顔を向けると、ナギアは笑いながら頭をポリポリと掻きだした。

「あはは、ゴメンゴメン。何か突然腹が減っちゃってな」

「はあ……だと思っただよ」

ナギアの言葉に俺は静かに返事をした。

(……まあでも、確かに俺達も腹は減ってるし、仕方がないと言えば仕方が無いかな?)

俺はそう思いながらフツと笑った後、皆のことは見回しながら話し掛けた。

「さてと……それじゃあさつさとアジトに戻ろうぜ、皆」

「おう!」

「うん!」

「ええ!」

「(おうよ!)」

皆の返事を聞いた後、俺達はアジトに向けて歩き始めた。

アジトの横にある竜舎にネ口を連れて行った後、俺達はアジトのドアを開けながら中へと入った。

「ただいま」

「ただいま——!」

「ただいま戻りました」

「たっだいまー！」

アジトの奥に向けて声を掛けると、奥の方からヘレナさんが微笑みながら歩いてきた。

「お帰りなさい、みんな。みんながギルドの依頼で出掛ける間に、みんな宛の手紙が来たわよ？」

「俺達宛の手紙ですか？」

「ええ」

ヘレナさんはエプロンのポケットから手紙を取り出すと、俺に手渡してくれた。

(手紙か……今回は誰からかな……)

俺はゆっくりと封を切り、中の便箋を取り出した後、手紙を読み始めた。

『飛行島の皆さんへ』

どうもどうも、お久しぶりです。

実はこの度、私が冒険家を養成するための学園を運営する事になりました。

ですが、現在まったく入学者がいけないという、由々しき事態に直面しております。

このままではいけない、どうにかしなければとシヤケを食べながら思ったその時、飛行島の皆さんや今までお会いした皆さんのお顔が思い浮かび、こうして筆を執った次第です。

飛行島の皆さんも日頃お忙しいとは思いますが、皆さんや他の方々限定の説明会を同封した要項に記載した日取りで行おうと思っておりますので、ご都合がよろしければ、是非とも参加して頂きたいです。

それでは……

シペ・コロ・カムイ

俺が手紙を読み終わると、キャトラが物珍しそうな様子で手紙を見ながら俺に話し掛けてきた。

「要するに、アタシ達にもその学園に入学して欲しいって事よね?」

「まあ、そういう事になるな」

俺は返事を返しながら、封筒からもう一枚の紙を取りだし、書かれている入学説明会の日程などを確認した。

「えーと……説明会は明日の午後、その学園の教室でやるみたいだな」

「ふむふむ……明日の午後からね。冒険家を養成するための学園って何だか面白そうだし。もし明日ギルドからの依頼があったら、ちゃちゃつと片付けてその説明会に参加してみよっか」

「だな。せっかくこうして手紙ももらったことだしな」

「ふふっ、そうね」

キヤトラ達が楽しそうに話しているのを眺めながら、俺は便箋と要項を封筒へと戻し、それをポケットへとしまった後、キヤトラ達に話し掛けた。

「よし……皆、明日はその説明会に参加出来るように、ギルドからの依頼をいつもよりも張り切っていくぞ！」

「おう！」

「うん！」

「ええ！」

アジトの入り口に皆の元気の良い返事の声が響き渡った。

翌日、俺達はギルドからの依頼を午前の中にこなし、そして依頼達成の報告をした後、手紙に書いてある学園がある島を目指して、学園の事などについて話をしながら飛行島で移動していた。

「冒険家を養成するための学園かあ……一体どんなところで、何があるのかしらね？」

「うーん……それは流石に、行ってみないと分からないんじゃないかな？」

「そうだけど……着くまでに色々予想してみるのも面白そうじゃない？」

「(予想か……確かに面白そうだな!)」

「でしょ? それじゃあアタシからいくわね?」

アタシはね……それなりに大きな食堂があると思うわ」

「食堂か……色々な人が通う事を考えれば、確かに必要かもしれないな」

「でしょ? それじゃあ次は……リオスの番よ」

「俺か……俺は予想と言うよりはあつて欲しいものだけど……やっぱり竜舎だな」

「竜舎か……一応ネロの事は知ってるわけだし、たぶん建ててくれてると思うぜ?」

「だと良いけど……もし無かった時はそれなりの手段を考えないとな」

「そうね。それじゃあ次は……」

そう言いながらキャトラがナギア達の方を向こうとしたその時、飛行島の進行方向に大きな島が見えてきた。

「……皆、もしかしたらあの島かもしれないぞ?」

俺がその島を指差ししながら皆に声を掛けると、皆が一斉にその島へと視線を向けた。

「へえー! 結構おつきい島ね! それに真ん中あたりにあるあのおつきい建物、あれがその学園なのかしらね?」

「ふふつ、そうね」

キャトラとアイリスが微笑みながら話していると、その横でナギアとネロが島を見な

がら顔をパアツと輝かせていた。

「スツゴく冒険のしがいがありそうな島だなあ……！」

なあ、ネロ！ 後で皆で探索してみようぜ！」

「おう！ もちろんだぜ！」

ナギアとネロが楽しそうに話している様子を見ながら、俺は苦笑いを浮かべ、再び島の方へと視線を向けた。

(……まあでも、その気持ちは分からなくは無いかもしれないな)

徐々に近づく島を見ながら、静かにそう思っていたその時。

「おい、リオス。そろそろ着陸をするから、準備を始めるよう皆に伝えてくれるか？」

後ろの方から静かな声が聞こえたため、俺はゆっくりと振り返った。するとそこには

バロンさんの姿があった。

「分かりました、バロンさん」

「うむ、頼んだぞ」

バロンさんは満足そうに頷くと、クルツと振り返り、アジトの方へと歩いて行った。

そしてそれを見送った後、俺は皆の方へと向き直ってから声を掛けた。

「皆。バロンさんがそろそろ着陸をするから、準備を始めてくれってさ」

「ああ、分かったぜ！」

「うん!」

「オツケーよ!」

「(了解!)」

そして俺達は飛行島が着陸するための準備を始めた。

「……よつし、無事上陸完了だな!」

「だな」

件の島の港に上陸した後、俺達は周りを見回した。港には積荷を積んだ船などが多く留まっており、その積荷も机や椅子などから、果物や魚などの食料、そして一見何に使うのか分からない物などもあった。

(へえ……何か色々な物があるな。これが全部例の学園に運ばれるのかな……?)

そう思いながら、港の様子を静かに眺めていたその時。

「おっ! お前達も来てたのか!」

「ボンジュールでござる! みんな!」

突然、近くからそんな声が聞こえたため、俺達が声のした方へ向いてみると、革命軍所属の少年―ザック・レヴィンと花の都の島出身のくのいち―フラン・ポワリエの二人

が笑顔で俺達に向けて走ってきていた。

「ザック、それにフランも。久しぶりだな」

「おう！ 皆、元気だったか？」

「ええ！ アンタ達も見た感じ元気そうね」

「ウイ！ セツシャ達も変わらず元気でごさる！」

俺達は微笑みながら握手を交わした。

（この様子だと、ザック達もあの手紙を貰ってここに来たみたいだな）

握手を交わしながらそう思っていたその時。

「あ、みなさん！ お久しぶりです！」

また近くからそんな声が聞こえたため、そちらの方へ向いてみると、氷の島の王女――ソフィ・R・ファルクさんと帝国海軍に所属している少女――カモメ・ナルミ、そして修道女の姿で日々入信者を募っている悪魔――ミラ・フェンリエッタの3人が歩いてきた。

「あら、ソフィにカモメ、それにミラも。アンタ達もカムイに呼ばれたのね？」

「その通りであります！ キャトラ航海士！」

キャトラの言葉にカモメがビシツと敬礼をしながら元気良く答える横で、ミラが静かな声で話し始めた。

「さっきここに着いた時に、偶然この2人に会ってね。それで話を聞いてみたら、アタシ

と同じ理由でここに來たつて言うから、一緒に行くことにしたのよ」

「へえ……珍しい3人組だと思つたら、そういう事だったのね」

「はい♪」

キャトラの言葉にソフィさんが穏やかに微笑みながら答えた。

(それにしても……ザックにフラン、そしてソフィさんにカモメ、それにミラか。後は一体誰が呼ばれてるんだろう……?)

そんな事を考えていたその時。

「おお! 皆も来ていたのか!」

「ふむ……中々珍しい顔触れだな」

三度、そんな声が聞こえたため、ゆっくりとそちらの方へ向いてみると、そこにはバ
ルラ島出身の騎士ークライヴ・ローウエルさんと不死者の帝王である傍ら日々笑いを追
求している吸血鬼ーヴィルフリート・オルクスの2人が歩いてきていた。

(今度はクライヴさんにヴィルフリートさんか。

……にしても、珍しいコンビだな)

そう思いながら、俺は近付いてきた2人に挨拶をした。

「お久しぶりです、クライヴさん、ヴィルフリートさん」

「ああ、久しぶり」

「うむ、久方ぶりだな」

俺がクライヴさん達と挨拶をしながら握手を交わしていると、ネロが首を傾げながらクライヴさん達に話し掛けた。

「(にしても……クライヴとヴィルフリートって、何か珍しいコンビだよな?)」

「ああ。実は……ここに来る途中の船の中で、偶然ヴィルフリート殿に会ってな」

「うむ。そして話してみたところ、我と同じ理由でここを目指しているとの事だったため、共にここまで来たというわけだ」

「(ふーん、なるほどねえ……)」

ネロが静かな声で言った後、キャトラが俺達の事を見回しながらこう言った。

「それにしても……カムイから呼ばれたのってこれで全員なのかしらね?」

「うーん……どうなんだろうね?」

キャトラとアイリスが不思議そうに話をしていたその時。

「あ、みなさん。もうお着きになっていたんですね?」

突然、俺達の後ろの方からそんな声が聞こえた。そして振り返ってみると、そこには今回の説明会の主催者であるカムイさんの姿があった。

「あら、カムイじゃない。てつきり例の学園で待ってるのかと思ってたら、こんなところにいたのね?」

キヤトラがそう訊くと、カムイさんは頭を掻きながら穏やかな声で答えた。

「いやー……最初はそうしようかなとも思ってたんですが、やっぱり呼び出したからには自分で学園まで案内をするのがスジだと思ひましてね」

「ふーん。ところで、今回手紙で呼んだのって、これで全員なの？」

「はい。本当はもう少し呼び出したかったのですが……」

まあ、その話はおいといて……そろそろ学園へと移動しましょうか」

カムイさんの言葉に静かに頷いた後、俺達はカムイさんの後に続いて学園へと続く道を歩いて行った。

港を出発してから十数分後、俺達は件の学園の校門へと辿り着いた。

「さて……それじゃあ今から、校門を開けますね？」

カムイさんはそう言うのと、どこからか鍵を1つ取り出し、それを校門に掛けていた錠前へと差し込んだ。そしてそれから程なくして、錠前からカチツという音が聞こえたかと思うと、カムイさんが両手を使ってゆっくりと校門を開け始めた。そして校門を開き終わると、カムイさんは俺達の方へと向き直った。

「さて……それでは早速、学園の中へと入りましょう」

俺達は再び静かに頷いた後、カムイさんと一緒に校門をくぐり、学園の中へと入っていった。そして俺達の目に飛び込んだきたのは、

「さあ、着きましたよ。ここが私が学長を務める学園、その名も【茶熊学園】です」
とても広い運動場や赤い屋根の校舎などがある【茶熊学園】の姿だった。

「ここが【茶熊学園】か……」

俺達はカムイさんと一緒に歩きながら周りを見回した。

（当然と言えば当然だけど、やっぱり飛行島では見ないような物ばかりがあるな……）

目に飛び込んでくる様々な物を見ながら思っていると、キャトラがカムイさんに静かな声で訊いた。

「飛行島から見た時もあったけど、ここってとっても広いわよね？」

「ええ。この島全体が【茶熊学園】の敷地となっていますから。そしてその分、様々な施設や設備を取りそろえています」

「様々な施設や設備……ですか？」

「はい。」

「……まあ、それらに関しては後ほどご紹介致しますので、先に校舎の中へと入りましょうか」

俺達はカムイさんの後に続いて、【茶熊学園】の校舎の中へと入っていった。

そして数分後、カムイさんは教室の前で足を止めると、静かに部屋の戸を開けた。

「それでは皆さん、教室の中へと入って下さい」

カムイさんの言葉に頷いた後、俺達は教室の中へと入った。教室の中には十数組ほどの机と椅子など綺麗に並べられており、俺達は前の方から順々に座っていった。そして俺達が全員座ったことを確認すると、カムイさんは教壇と黒板の間に立ち、そして俺達の方へと顔を向けた。

「さて……それではこれから【茶熊学園】の入学説明会を始めたいと思います」

カムイさんはそう言った後、一本の白いチョークを手に取り、それを使って黒板に次々と文字を書き始めた。そして書き終わった後、カムイさんは再び俺達の方へと顔を向けた。

「さて……まずはこの【茶熊学園】の役割について説明致しますね。」

【茶熊学園】は手紙にも書きましたが、皆さんのような冒険家を養成するための学園ではあるのですが、それと同時に【闇】に対応できる冒険家を育成するための学園でもあります」

【闇】……」

カムイさんの言葉にアイリスが不安げな表情を浮かべながら呟いた。

「はい。皆さんもご存じのように【闇】は各地で目撃されており、その被害の程度もまちまちですが、時にはとても大きな被害を及ぼしています」

『そうですね……私達も様々な場所で彼らと遭遇していますが、必ずと言ってても良いほど、どなたかが大きな被害を被っています……』

カバンの中から賢者のルーン—ワイズが暗い声で言うと、カムイさんは静かに頷いてから言葉が続けた。

「そこでその対策として建設されたのが、この【茶熊学園】です」

そう言ってカムイさんは黒板の方へ体を向けると、ここまでの事を黒板に書き始めた。そして書き終わった後、再び俺達の方へと向き直った。

「この【茶熊学園】では皆さんのように現在冒険家として活躍されている方を含めた様々な方に入学をして頂き、学園生活を送る中で交友を深めながら冒険家としての腕を磨いて頂く事を目的としています」

「学園生活か……カムイ殿、先程ここに来る途中で様々な施設や設備を取りそろえていると仰っていました、具体的にはどのような物があるのですか？」

クライヴさんが手を上げながら質問をすると、カムイさんは静かに頷いてから黒板の方へ体を向けた。

「そうですね……例えば、遠方から通う方々のための学生寮、そして体育館やプールなどといった運動のための施設、後はリオスさんのようにドラゴンライダーとして活躍されている方々のために竜舎なども準備してあります」

「ふーん……ねえ、カムイ。この学園に食堂とかはあるの?」

「はい、それはもちろん。通って頂く皆さんに不自由などが無いように、キッチリ色々取りはからっていますから」

「さつすがカムイ! 分かっている——!」

「冒険家は体が資本ですからね。衣食住についてはしっかりと抑えています。」

さて……それではそろそろ本題の方へ行きましょうか」

そう言った後、カムイさんは真剣な表情で言葉を続けた。

「ここまで『茶熊学園』について話してきましたが、皆さんはこの学園についてどのような印象を受けました?」

「そうですね……衣食住がしっかりとしてる上に、『闇』に対しての対策とかも考えてて、すごく良いと思うわ」

「私もキャトラと同じで、この『茶熊学園』はとても良いところだと思いました」

キャトラとアイリスが感想を言った後、俺を含めて全員が感想を言ったが、一人として悪い印象を持った人はいなかった。

(まあ、實際話を聞く限り、凄く生活しやすそうだな)

そう思っていると、カムイさんがホツとしたような様子で話し始めた。

「それなら良かったです。皆さんにそう言っただけで、不備などが少ないか少々不安に思ったりもしましたから。」

……それでは伺います。皆さん、この「茶熊学園」に入学して頂けますか?」

カムイさんの問いかけに、俺達は一度顔を見合わせた後、一斉にコクンと頷いた後、カムイさんの方へ顔を向けてから声を揃えて返事をした。

『はいー』

俺達の返事を聞くと、カムイさんは一度ぼうつとしたが、すぐにハツとなると、大きく息を吐きながら教壇へと倒れ込んだ。

「良かったあ……皆さんにそう言っただけで、私は一安心です……」

「ふふつ、せっかくのカムイの頼みだしね」

「ああ。それに冒険家としての活動の合間の学園生活つても、中々楽しそうだしな」

「キャトラさん……ナギアさん……」

キャトラとナギアの言葉にカムイさんは目をウルウルさせたが、すぐにどこからか取り出したハンカチで涙を拭くと、キリツとした顔で話し始めた。

「それでは、皆さんのための制服や教科書などといった物は、準備が出来次第お送りします

ので、入学式や学園にいらっしやる時は制服を着用してきて下さいね?」

「それはもちろんよろしいのですが……その入学式はいつ頃行う予定なのですか?」

「そうですね……皆さんや他の入学者さん達の準備が出来次第なので、それについてはまたお手紙でご連絡しますね」

「分かりました」

アイリスの言葉に一度頷いた後、カムイさんは俺達の事をジツと見ながら静かな声で言った。

「それでは……少々早いとは思いますが、この言葉を言わせて頂きますね」

そこで一度言葉を切った後、カムイさんはニコツと笑ってから言葉が続けた。

「ようこそ、【茶熊学園】へ!」

後日、俺達の上に【茶熊学園】の制服と教科書などが届いた。

「へえ……制服はこんな感じのデザインなのね」

「ふふっ、そうだね」

自分達の制服を見ながら楽しそうに話すキャトラ達の横で、教科書をを讀んでいたナギアとネロが静かな声で話し始めた。

「ふーん……こういう事を授業でやるんだな……」

「(みてえだな。」

……まあ、俺はお前らの授業中は竜舎で寝てるか、その辺の空でも飛んでることにしてるけどな)」

「そつか。まあ、授業が終わり次第、早めにネロのところに行けるように頑張るからさ。な、リオス？」

「ああ。だからそれまで少し暇な時もあるかもしれないけど、辛抱してくれよ？」

「へっ、そのくれえ余裕だよ。だからお前らはしっかりと授業を受けろよ？」

「ああ、もちろんだ」

「へへっ、だな！」

ナギアと笑い合った後、俺は自分の制服を太陽に翳した。

(いよいよ俺達の学園生活が始まる……何が起きるか分からないけど、色々な事を楽しみながら学園生活を送っていこう)

これからの事への期待に胸を膨らませていると、カバンの中からワイズが静かな声で話し掛けてきた。

『リオス様。学園生活においては、私も精いっぱいサポートをしますね』

「ああ。よろしくな、ワイズ」

『はい』

ワイズの返事を聞いた後、俺は澄み渡る青空へと顔を向けた。
(さあ……俺達の学園生活の始まりだ!)

第1章 茶熊学園1年時

第1話 桜色の春と転入生

春―それは暖かな気候の中、桜の花びらが舞い、人々が新たな生活に胸を膨らませる季節。

そしてそれはここ、冒険家養成学校〔私立茶熊学園〕でも別ではなく、この春から学園に通う学生達が賑やかな声を上げながら、次々と登校していた。だがそんな中、学園の校門の前に静かに立ち、一人学園の様子を眺めている少年がいた。

「へえ……ここが例の学校ね。どんなところかは知らないが……ま、俺が通ってた学校に比べたら天国だよな」

少年―ソウマ・ホクト・バスクナは静かに言うと、自身の体から発せられるソウルを納め、あらゆる気配を殺した。この状態のソウマは、誰からも知覚されないため、静かに行動する際には最適な手段と言えた。

そしてソウマは、その自身の様子に満足げに頷いた。

「ようし、これで良い。そーういや朝飯がまだだったか」

ソウマはカバンからサンドイッチを一つ取りだすと、それを静かに口にくわえた。

しかしその時、

「あ、あ、あ、朝飯を忘れたでござる——!」

クロワツサンを口にくわえた花の都の島出身のくのいちーフラン・ポワリエが、焦った様子で背後から走ってきたと思うと、勢い良くソウマへとぶつかった。

「のわああ!!」

「誰かにぶつかったでござる!?!」

誰かーソウマの声は聞こえたものの、その姿を知覚出来ないため、フランは不思議そうに首を傾げた後、そのまま走り去っていった。

「く……! — 一体何が……!」

フランとの衝突で生じた痛みには耐えながら、ソウマがゆっくりと立ち上がったその時、

「やっべー、朝までギターの練習してたら遅くなっちゃった!」

食パンの耳を口にくわえた革命軍の少年ーザック・レヴィンが、先程のフラン同様、とても焦った様子で背後から走ってきたと思うと、そのまま勢い良くソウマへとぶつかった。

「ぐああああ!!」

「やべっ、誰かにぶつかったか!?!」

ソウマの声を聞き、ザツクが周りを見回すも、今の状態のソウマを知覚出来ないため、不思議そうに首を傾げた後、急いでその場を走り去った。

「おいおい……二度同じ事があるって事は……」

ソウマが更に強くなった痛みには耐えながら、ゆつくりと立ち上がるとしたその時、プール掃除忘れてたあー!!」

コツペパンを口にくわえた帝国海軍所属の少女―カモメ・ナルミが、先程のフラン達同様、焦った様子で背後から走ってきたと思うと、勢い良くソウマへとぶつかった。

「どあああああ!!」

「え!? 誰かにぶつかっちゃった!?!」

ソウマの声を聞き、カモメも周りを見回したが、やはりソウマの姿を知覚出来ないため、不思議そうに首を傾げた後、プールがある方へと走り去っていった。

「……やっぱり三度あるよな……」

酷くなってきた衝突の痛みには顔をしかめつつ、ソウマがゆつくりと立ち上がると、
「ふふふ、小鳥さん、おはようございます」

桜の木に留まっている小鳥達に挨拶をしながら、氷の国の王女―ソフィ・R・ファルクがゆつくりと歩いてきた。

「おっ」

「えっ!? 何か見えないものにぶつかったような?」

ソフィは不思議そうな様子で周りを見回したが、すぐ近くに立っているソウマの事を知覚出来ないため、カモメ達と同様に首を傾げた後、ゆったりとした様子でその場を去っていった。

「ふう……流石に四回も突き飛ばされたりはしないみたいだな」

その様子を見て、ソウマが安心した表情で独りごちていたその時、

「朝はパンをくわえ……走る!」

バゲットを縦にくわえた不死者の帝王―ヴィルフリート・オルクスが、背後からとても綺麗なフォームで走ってきたかと思うと、先程までとは比べものにならない程の勢いでソウマへとぶつかった。

「べかしこ!」

ソウマがぶつかった衝撃で妙な声を上げ、そのまま地面に倒れ込みそうになったその時、

「な、なに? 何みんな走ってるわけ!」

学友達の様子を不思議に思いながらも、思わず自身も走りだしてしまったシスター姿の悪魔―ミラ・フェンリエッタが、バランスを崩しているソウマへと勢い良くぶつかった。

「ずべらー!」

「何かぶつかつた!? でも走らなきゃ!! 走らなきゃ、アタシ!!」

実際走る必要はまったく無いのだが、走らなければいけないという思いに駆られたミラは、どこからか聞こえたソウマの声を不思議に思いながらも、そのまま急いで走り去つた。そしてその場にはここまでの衝突のダメージによって、満身創痍と言つても過言ではない様子で倒れているソウマだけが残された。

「……本当に何なんだよ、一体……」

もはや立ち上がる気力すら無くなりそうになりながら、ソウマは静かに呟いた。
すると、

「みんな何を走っているんだ? まだ登校時間には余裕があるのに」

バルラ国出身の騎士ークライヴ・ローウエルが、先程のミラとは違い、学友達の様子に疑問を抱きながらもゆつくりとした足取りで歩いてきた。そしてそんなクライヴに、数人の生達があ挨拶をするために後ろから声を掛けた。

「おはよう、クライヴ」

「おはようございます、クライヴさん」

「おはようございます、クライヴさん」

「クライヴさん、おはようございます!」

「(はよーっす、クライヴー)」

『おはようございます、クライヴ様』

声に気付いたクライヴが後ろを振り返ってみると、そこにいたのは大いなるルーンを求め、様々な島を巡っている飛行島の面々だった。

「ああ、おはよう、みんな」

クライヴが微笑みながら挨拶を返すと、アイリスが微笑みを返しながらクライヴへと話し掛けた。

「ふふっ、気持ちが良い朝ですね」

「そうだな、良い朝だ。何だか俺も走り出したい気分だよ」

「(俺もって……誰か走ってたのか?)」

「ん? ああ、さっきザックやミラが走って行ったのを見掛けただけだよ」

「あ、なるほどね」

クライヴとリオス達が仲良く話しながら歩いていたその時。

「……ん?」

突然リオスがそんな声を上げた。その様子を見て、ナギアが不思議そうな顔でリオスに訊いた。

「リオス、どうかしたのか?」

「いや……あそこに倒れてるのって、もしかしなくても人、だよな？」
「え……？」

リオスが指差す方に一同が目を向けると、そこには先程までのダメージによって、地面に倒れているソウマの姿があった。

「あ、本当だわ！」

「それにかなり傷ついてるみたいだし、急いで手当てをしないと……！」

急ごう、皆！」

リオスの言葉に頷くと、一同はソウマの元へと急いだ。

「大丈夫ですか!？」

アイリスがソウマに近づいてそう訊くと、

ソウマは誰にも聞こえないほど小さな声でポツリと呟いた。

「……なんなんだ、この学校は……」

「まずはこの傷をどうにかしないと……！」

リオス、手伝って！」

「分かった！」

アイリスの頼みに答えながら、俺は背中に差していた「ソードオブマギア」を構え、鏢に収められているオーブに籠められている水の魔力を高めた。

「イノセントヒール！」

「ブルーヒーリング！」

俺達の治癒魔法の光が倒れている人を包み込むと、その人の傷は見る見るうちに消えていった。

（ふう……これでとりあえずは大丈夫なはずだけど……）

「ソードオブマギア」を背中に差しながらその人の様子を見ると、

「何だ……？ 体が急に、楽に……？」

不思議そうな声で言いながら、ゆつくりと立ち上がった。そして俺達の方へ振り返ると、俺達の事を見ながら話し掛けてきた。

「アンタ達が……俺の事を……？」

「ええ、そうよ」

「（……まあ、正しく言うなら、リオスとアイリスが、だけどな）」

キヤトラとネロが小さく笑いながら答えると、その人は不思議そうな表情を浮かべながらキヤトラとネロの事をジッと見つめた。

「……今、その猫と竜が喋らなかつたか？」

「喋ったわよ？　ね、ネロ？」

「（ああ。」

……まあ、俺の場合はちよつと特殊だけだな）」

再びキャトラとネロが答えると、その人は額を抑えながら小さな声で呟くように言った。

「……おいおい、本当にこの学校は何なんだよ……」

「何って言われてもねえ……まあ、それはさておき……」

キャトラはそう言うと、その人の事をジツと見始めた。そしてその様子を見ると、その人は少し警戒した様子でキャトラに訊いた。

「な……何だよ、一体……？」

「いや……何であんなにボロボロになってたのかなあつて思つてね」

「……ああ、その事か。ちよつと転んじまっただけだよ、まったくついてないぜ」

「傷は治っているようだが、一応保健室に行つてはどうだ？」

「いや、さつきよりは確実に楽にはなってるから、大丈夫さ」

「うーん……アンタが大丈夫なら良いけど……」

その人の言葉にそう返事をしたが、キャトラはまだ少しだけ納得していない様子だった。

(……まあ、キャトラの気持ちも分からなくは無いけど、本人が大丈夫って言ってるんだし、とりあえず大丈夫って事にしとくか)

心の中でそう結論づけていると、

「あ……」

突然ナギアが何かを思い出したように声を上げた。

「ん？ どうかしたのか？」

「そういえば、自己紹介がまだだったなあと思ってさ」

「あ……言われてみれば……」

「ふむ、確かにそうね……」

キャトラは顎に前足を当てながら言った後、俺達の事を見回しながら言葉を続けた。

「せっかくだし、ここらで自己紹介でもしときましようか」

「そうだな。それじゃあ、まずは俺達から……」

そう言つてカバンの中からワイズを出した後、俺は自己紹介を始めた。

「俺はリオス、冒険家兼この茶熊学園の生徒だ、よろしく」

「よし、次は俺だな。」

俺はナギア、リオス達と同じで、冒険家兼茶熊学園の生徒だ、よろしくな」

「私はアイリス、リオス達と同じで、冒険家兼茶熊学園の生徒です。よろしくお願いしま

す」

「アタシはキャトラよ、よろしくね」

「俺はクライヴ、リオス達と同じ茶熊学園の生徒だ、よろしくな」

「(俺はネロだ、よろしくな!)」

『私は賢者のルーンのワイズと申します、どうぞよろしくお願い致します』

ワイズが自己紹介を終えた時、その人はまた不思議そうな顔になった。

「賢者の……ルーン……?」

『はい。幾つかの制約に抵触しない限り、この世界のあらゆる事についてお教えするルーン。それが私、賢者のルーンなのです』

「……なるほどな」

その人は呟くように言った後、落ち着いた様子で自己紹介を始めた。

「それじゃあ、今度は俺だな。俺はソウマ・ホクト・バスクナ。この茶熊学園の転校生だ、よろしくな」

「ああ、よろしく」

そう返事をした後、俺達がソウマと握手を交わしていたその時だった。

「おーや、これはこれは皆さん。おそろいで」

校舎の方からのんびりとした声が聞こえたため、俺達は声の方へ視線を向けた。する

とそこにいたのは、いかにも学校の先生らしい格好をし、手にとっても厚い本を持ったカムイさんだった。

ソウマはカムイさんの姿を見ると、一瞬真顔になった後、不思議そうな顔で俺達に訊いた。

「……今、この熊が喋った気がしたんだが?」

「喋ったわよ。ね、カムイ」

「ええ。磨穿鉄硯の精神を持つてすれば、雲外蒼天ですから」

「アンタは……一体……?」

ソウマが不思議そうに訊くと、カムイさんは角帽を脱いでからソウマの質問に答えた。

「あ、申し遅れました。私は茶熊学園の学長、カムイと申します」

「学長!? アンタが!」

「ええ。さて、それはさておき……」

カムイさんはアイリスの方へ向くと、ニコニコしながらアイリスに話し掛けた。

「アイリスさん。制服、とても良くお似合いですねえ。ちよつとこう……クルツて回ってみてくれませんか?」

「(こ)う……ですか?」

アイリスがその場でゆっくりと回ると、カムイさんはとても良い笑顔で大声を上げた。

「ああ、良い！ 実に素晴らしい！ 巨額の資金を投入した甲斐がありましたよ！」

「(巨額の資金つて……この制服に、か……う)」

「はい」

カムイさんがしれっとした様子で答えると、キャトラが毛を逆立てながらカムイさんに怒り始めた。

「学長ともあろうものが、学園の資金を趣味に使い込むんじゃないわよ！」

「いやー、これも学園に人を呼び込むためですからねー。」

ほら、制服が可愛いとか学園の設備が良いものだとかで話題になれば、それが次の入学者アップにも繋がるじゃないですか」

「う……それについては反論できないわね……」

(いや……まだ反論の余地はある気がするんだけど……)

心の中で静かにツツコミを入れてみると、カムイさんがソウマの方へと顔を向けた。

「ところで、貴方はソウマさん……でしたよね？」

「そうですけど。何すか、カムイ学長」

「実は……学園の方から、貴方にこれを渡せと言われてまして……」

そう言うと、カムイさんはどこからかシャケの形をした物を取り出し、ソウマへと手渡した。ソウマは渡された物をジッと見た後、少し警戒した様子でカムイさんに訊いた。

「これは……何なんですか？」

「これは二対一体の武器、つまりは双剣の類いのようです。貴重な品らしいですよ。」

「誰が俺にこんな物を？俺は天涯孤独だつていうのに……」

「それが誰かは僕にも分かりません。ですが……これほどの物を貴方に託すくらいですから、その人はソウマさんにとっても期待しているのかもしれないね」

「……期待、ね」

ソウマはシャケの形をした双剣を何度か握り直したりした後、カムイさんの方へ向き直った。

「わかった。ありがたく使わせてもらおうぜ」

「はい！僕も期待してますからね、ソウマさん！」

「うっす！」

ソウマが返事をした後、カムイさんはうんうんと頷いてから俺達に話し掛けてきた。

「さて、そろそろ全校朝礼の時間ですし、僕達も講堂に参りましょうか」

そのカムイさんの言葉に俺は頷きかけたが、先にネ口を竜舎へと連れて行く必要があ

る事を思い出したため、竜舎の方向へと体を向けながら、俺は皆に声を掛けた。

「俺はネロを竜舎に連れて行くから、皆は先に行つてくれ」

「ん、分かった」

「それじゃあ、また後でね」

「ああ。よし……行くぞ、ネロ、ワイズ」

「(おう!)」

『はい』

こうして俺達は、竜舎へ向かつて歩き始めた。

竜舎に着いた後、俺はネロをその中の一室に繋ぎ、背中をポンポンと叩きながら声を掛けた。

「昼と放課後になったら来るから、それまで待つてくれよ?」

「(おう。お前らの事は適当に待つてることにするから、安心して授業を受けてこい)」

「ああ、分かった」

返事をした後、俺は部屋の外へと出た。そしてネロの方を振り返つてから再び声を掛けた。

「それじゃあ、また後でな」

『それでは、また後で』

「おう！」

ネロの返事を聞いた後、俺達はナギア達が待つ講堂へと急いだ。

講堂に着いてみると、既に他の生徒達が楽しそうに話をしたり、身だしなみを整えていたりしながら、全校朝礼が始まるのを待っていた。

(さて……ナギア達はどこかな?)

ナギア達を探すために周りを見回していると、突然後ろから肩をポンポンと叩かれた。

(ん……?)

振り向いてみると、そこには微笑みながら俺の事を見ているナギア達の姿があった。(どうやら探す手間が省けたみたいだな)

俺はフツと笑った後、ナギア達に話し掛けた。

「お待たせ、皆。見たところ、まだ全校朝礼は始まってないみたいだな」

「うん。でもそろそろ始まると思うわよ?」

キャトラがそう言ったその時。

「ハイハイ、皆さん、朝礼を始めますよー」

カムイさんが置かれてあるマイクを使いつつ、のんびりとした声で話を始めた。

「えー、皆さん。現代の社会の発展には、優れた冒険家の活躍が欠かせません。しかし冒険家というのは、ただ魔物を討伐したり、遺跡で遊んだりしてれば良いわけではないのです。知られざる世界を切り開き、人々の生活に貢献する。これこそが冒険家なのです。皆さんもこの学園でしっかり学んで、立派な冒険家になつて下さい。」

……以上で、朝礼を終わります」

カムイさんは一礼をした後、静かにマイクから離れた。そしてそれを見て、他の生徒達が次々と講堂の外へと出て行った。

「朝礼つて言うから、それなりに時間が掛かるもんだと思ってたけど、意外と早く終わったな」

「そうね」

ナギアとキャトラの会話を聞きながら講堂の入口を見ていると、手に紙のような物を持ったミラが、急いで講堂の外へと出ていく様子が見えた。

（どうやら講堂から出てくる生徒を相手に布教活動をするつもりみたいだけど……あんなに急ぐ必要が果たしてあるのかな……？）

ミラの行動に少しだけ疑問を抱きつつ、俺はナギア達に声を掛けた。

「それじゃあ、俺達もそろそろ行こうぜ」

「おう！」

「うん」

「うん！」

「ああ」

他の生徒達が出て行くのに続いて、俺達も講堂の外へと出て行った。

講堂の外に出てみると、ニコニコ顔のミラが講堂から出てくる生徒達に次々と持っている紙を渡していた。

（あはは……やっぱりか）

心の中で苦笑いを浮かべながらミラの近くを通ろうとした時、

「その人も、はいどーぞ！」

ミラがニコニコしながらソウマに紙を渡した。ソウマは渡された紙を一読すると、不思議そうな顔になった。

「……何だこれ？ 白い聖女教……？」

「そうよ！ 今入信すれば、もやし栽培セットも付いてくるのよー！」

ミラが眼鏡をクイツと上げながら言うが、ソウマは不思議そうな顔のまま返事をした。

「……やつぱ、知らねえなあ……？」

「アンタ知らないの？ さてはモグリね！ 今世界中で大フィーバーしてるつてのに！！」

「そ、そうなのか……？」

ソウマが訊くと、ミラはばあつと顔を輝かせながら言葉を続けた。

「興味を持ったわね!! それじゃあ、詳しく教えてあげるわ!!」

「あ、いや……えーと……」

ぐいぐい来るミラにソウマがかなり戸惑っていると、キャトラがミラの事を呆れた様子で見つつ、呟くように言った。

「ミラったら、またやつてるのね……どうして懲りないのかしらね？」

「……さあな」

ミラとソウマのやり取りを静かに見守っていたその時、突然どこからか大砲の音が聞こえてきた。

「な、何だ!？」

ソウマが慌てた様子で周りを見回していると、再びどこからか大砲の音が聞こえてきた。

(まただ……でも一体どこから……?)

不思議に思いながら周囲を見回すと、少し離れたところに何隻もの軍艦の姿が見えた。

軍艦……つて事は、もしかしてカモメの関係者か？

そんな事を考えながら軍艦の様子を窺っていると、カモメが軍艦の方へ向かってビシツとした姿勢で立ち――

「敬礼であります！」

大きな声で言いながら軍艦へ向かって綺麗な敬礼を見せると、船の上にいる船員達もそれに応えるように敬礼を返してきた。そしてその様子を見ると、アイリスが納得した様子でカモメに声を掛けた。

「カモメさん。もしかしてあの人達は、帝国海軍の人達ですか？」

「はい！ 私にとつてとても大切な同輩達であります！」

カモメがニコツツと笑いながら答えると、カムイさんは心の底から安心した様子で小さく息をついた。

「ふう……驚かささないで下さいよ……じゃあこれは、いわゆる礼砲ですね」

「礼砲？ 何それ？」

「軍艦が敬意を込めて、空の大砲を撃つという儀式ですよ。おそらくカモメさんの入学祝いかと」

「じゃああれは、カモメのために撃っていたのね」

「えへへ……ちよつと照れますね」

キヤトラ達の言葉を聞き、カモメが頭を掻きながら答えていると、ソフィさんが船を見ながら弾んだ声で言った。

「あれは、帝国海軍第七艦隊旗艦、チャーチワイデンですねー！」

「ご存じなんですか、ソフィさん？」

「我が国の式典にご招待をしたことがあるのです」

「そうだったんですね」

ソフィさんとアイリスが話していると、ワイズがカバンの中からチャーチワイデンについての説明してくれた。

『チャーチワイデンは第四世代のルーンシップの一つで、帝国の船の中でも古い設計の船です。』

戦艦として初めてスクリューを搭載し、そして動力にルーン蒸気機関を備えておりまして、無骨なその見た目から、ウミガメというあだ名も付けられています』

「へえー、そうなのね」

「そして衝角による突撃で飛行船を撃沈したという逸話でも有名な、七海戦争の武勲艦なのであります！」

カモメが誇らしげな顔で補足説明をしてくれている内に、チャーチワイデンは礼砲を撃ち終わったらしく、砲塔から白い煙を出しながら静かに佇み始めた。

「もう終わったみたいだけど……ずいぶんな数撃つてたわね」

「因みに礼砲は、敬意を表す人の偉さによって、撃つ数も決まっているんですよ」

「あ、そうなのね」

「はい。」

えーと……今回はー発でしたので、帝国の礼式だと……」

そう言った次の瞬間、カムイさんの顔に驚きの色が浮かび、呆然としながらカモメの事を見始めた。その様子を見て、キャトラとカモメが不思議そうな顔で訊いた。

「どうしたのよ、カムイ。カモメの事をジッと見つめて」

「カムイ学長殿、どうかされましたか？」

「あ……い、いえ、何でもありません……」

カムイさんはキャトラ達に答えた後、服のポケットからハンカチを取りだし、額の汗を拭き始めた。その様子を見つつ、俺はこっそりワイズに話し掛けた。

「……ワイズ、11発の礼砲って、帝国の礼式だどういう意味になるんだ？」

『……11発ですと、特命公使を讃える礼砲ですね』

「なるほどな……」

ワイズの答えに納得していると、カムイさんが落ち着きを取り戻した様子で俺達に話し掛けてきた。

「ところで皆さん。部活はもうお決めになりましたか？」

「部活？」

「うん。学校の授業とは別に、趣味やスポーツをするためのクラブを作ることが認められているの」

「へえ……そんなのもあるのねえ」

「でも、俺達はまだ決まっていなくて……他のみんなはどんな部活に入ってるんだろうな？」

「それは授業が終わってから、みんなに訊いてみましょう？」

「それもそうだな。」

よし……それじゃあまずは、授業を受けるとしようか」

『お——』

キャトラ達の返事を聞いた後、俺達は授業を受けるために茶熊学園の校舎へと向かつ

た。

第2話 部活動見学く文化部編

その日の授業が全て終わった後、俺達は同じクラスのソフィさん達と部活動について話をしていた。

「皆さんはどんな部活に入る予定なんですか？」

「私は、新体操部に入ろうと思います」

「新体操……？ それって何なの？」

キャトラが不思議そうに訊くと、ソフィさんは静かに微笑みながら答えた。

「音楽に合わせて演技を競う体操のことです。昔、少しだけやっていたので、この機会に改めてと思ひまして」

「そうなのね」

キャトラが返事をする、今度はカモメがピシツという音がしそうな程の敬礼をしなから、弾んだ声で言った。

「私は水泳部に入りました！」

「まあ……たしかにそういう格好をしてるわね、水着の上にジャージだし」

「授業が終わったらすぐにプールで泳げるので、とっても楽なんです!」

「そりゃあそうよね」

「ゆくゆくはクジラと一緒に、海の中を泳ぐつもりであります!」

「うーん……それは楽しそうだけど、水泳部の活動として正しいの……かな?」

カモメの言葉に俺が少し疑問を覚えていると、ソフィさんが静かに微笑みながら俺達に訊いた。

「そういえば、アイリス様やリオス様は、部活動はお決めになりましたか?」

「それがまだ決めてなくて……」

「それでみんなに色々と訊いてみてから、入る部活を決めようって事にしたんです」

「ふふっ、そうだったのですね」

アイリスとナギアの言葉を聞き、ソフィさんが微笑みながら言った後、キャトラがクライヴさんに訊き始めた。

「クライヴはどうするの?」

「俺は、この学校を守るため、風紀委員に専念する。騎士兼この学校の生徒としてな」

「ふふ、ご立派です、クライヴ様」

「ありがとう、ソフィ殿」

ソフィさんの言葉にクライヴさんがニコツと笑いながら答えていると、ソウマが呟く

よような声で言った。

「部活ねえ。学校で勉強以外のことをするのか……」

「アンタは前の学校でそういう事はしてなかったの？」

「ん……まあ、そうだな」

「そう。それならアンタも何かやってみたら？」

「……そうだな。せっかくだし、考えてみるか」

キヤトラの言葉にソウマがニツと笑いながら返事をした。

（部活か……ソウマの言う通り、せっかくの機会だし、何か入れそうなのがあれば入っておきたいけど、俺の場合はネロの事もあるしなあ……）

俺がそう思っていると、ミラが掛けていた眼鏡をクイツと上げながら自信満々な様子で言った。

「あたしは、自分で創部をしたわ！ 部活の裏で布教活動をするためにね！」

「アンタねえ……そこをバラしてどうすんのよ」

キヤトラがため息混じりに言うが、ミラはそのままの調子で返事をした。

「だって、アンタ達にはもうバレてんだし、言ったところで問題はないでしょ？」

「まあ、それもそうね。ところで、何の部活なの？」

キヤトラが興味ありげに訊くと、ミラは眼鏡をキラリと光らせながら大きな声で言っ

た。

「知りたい？ それならあたしについてらっしゃい！ このあたしの部活動の様子を見せてあげるわ！」

「あ、ああ……うん。よろしくな……ミラ」

「ええ！ それじゃあ、ついてきなさい！」

そう言うと、ミラは胸を張りながら廊下へと出て行った。

(……何だか部活動見学とは違う物が始まりそうな雰囲気なんだけど……まあ、良いか) 心の中でそう結論づけた後、俺は皆と一緒にミラの後について行った。

ミラの後に続いて歩き続けること数分。ミラは部室棟の外にある部屋の前で立ち止まると、クルツと俺達の方へ振り返った。

「さあ、見なさい！ これがあたしの部室、そして部活動よ！」

そしてミラが部室の扉を開け放つと、そこにあったのはビンやバケツ、そして洗面器などあらゆる容器で栽培されている無数のもやしだった。

(……え？ 何でこんなにもやしがあるんだ……？)

もやしを見ながら俺が疑問に思っていると、ミラが眼鏡を再びクイツと上げながら大きな声で言った。

「どう？　これがあたしの……園芸部よ！」

「いやいや！　これじゃあ、園芸部じゃなくてもやし部じゃない！」

キヤトラが大きな声を上げるが、ミラはそのままの調子で言葉を続けた。

「やってる事自体は園芸なんだから、間違つてないわよ。」

『もやしを愛し、もやしを慈しみ、もやしを学ぶ！』

それがあたしの『園芸部』なんだから！」

「結局もやし部じゃないの！」

ミラの言葉にキヤトラが大声でツツコミを入れてみると、アイリスが何かに気付いた様子で声を上げた。

「あれ？　こんなところに星たぬきがいるわ？」

見てみると、そこにはたしかに一匹の星たぬきの姿があった。

（流石に誰かのペット……って事は無いよな？）

星たぬきを見ながら不思議に思っていると、星たぬきはミラのもやしに向かつてトコトコと歩き出し、もやしの目の前でピタッと止まると、美味しそうにもやしを食べ始めた。

「あーっ!! ちょっと! あたしのもやしに何してんのよ!」

ミラが星たぬきに向かって大声を上げたが、星たぬきはそれを気にすることなくムシャムシャともやしを食べ続けていた。

すると、

「やれやれ。今片付けてやるよ」

その様子を見て、ソウマがカムイさんからもらった双剣を構え始めた。しかし、ソウマが星たぬきに攻撃をしかけるよりも先に、ミラが怒りながら雷の魔力を溜め始め、

「汝盗むなかれ!! 懺悔しなさい!!」

魔力が溜まった瞬間、ミラは星たぬきに向かって巨大な雷を落とした。

「キュキューン!」

雷が当たると、星たぬきは見ると見るうちに消滅していった。

(……まあ、こんな威力の雷を食らえばそうなるよな)

俺が苦笑いを浮かべている内に、ミラが落とした雷は姿を消し、その場には焦げた土の匂いと星たぬきによって食い荒らされたもやしだけが残っていた。

「……まったく油断も隙もありやしなわ。」

……あっ!! もやしがつ!!」

ミラは声を上げながらもやしへと近づいた。

すると、

「……調理されてるわ。なるほど、雷を使った調理方法か……メモメモ」

多少焦げたりしているもやしを見ながらメモを取り始めた。

「……まあ、アンタが良いなら、アタシ達は何も言わないわ」

キヤトラが少し呆れた様子でミラに言っていると、ソウマが興味津々な様子でミラに話し掛け始めた。

「あんた、すげえなその技。どこで習ったんだ？」

「え？ 別に、習ったわけじゃないわよ？」

「そうか……」

ミラに返事をした後、ソウマは呟くように独りごちた。

「……習ってなくても雷を出せるのか。」

「そういうやつもいるんだな……」

ソウマが独りごちている間に、ミラはメモを取り終わると、再び俺達の方へと向き直った。

「さて、アンタ達もこの園芸部に入る気は無い？ 今ならあたしからのありがたい言葉も付いてくるわよ？」

「うん、ありがたい言葉はいらないし、アタシ達はもう少し色々な部活を見に行ってみる」

わ」

「そう。まあ、頑張りなさい」

ミラの言葉に頷いた後、俺達は別の部活動を見に行くために園芸部を後にした。

園芸部を出た後、俺達は部室棟の中を歩いていった。

「それにしても部室棟だけあって、色々な部室があるわね」

「だな。ただ、さっきの園芸部は園芸部って言って良いのか微妙なところだけど……」

「うーん……ちゃんと植物の栽培をしてたし、園芸部じゃないのかな？」

「そうだな。まあ、もやしを愛する気持ちはわかるけど、もっと別の野菜とかも育てて欲しい気もするよな」

「そうね。」

「……あら？」

突然キャトラはある部室の前で足を止めると、中の様子を見ながら言葉を続けた。

「もうこの部室には部活が入ってるみたいよ」

「あ、本当だ」

「どんな部活なのか気になるし、ちょっと見ていきましようか」

アイリスの言葉に頷いた後、俺達はその部室の中へと入っていった。

中へ入った瞬間、部室内の冷たく張り詰めた空気が俺達に伝わってきた。

(この空気は……もしかして……)

そして部室内を見てみると、そこには幾つかの椅子の前に置かれた黒い座布団の上で、微動だにせずに正座をしているヴィルフリートさんの姿があった。

(あー……やっぱりか……)

「……何かすげえのがあるな」

「……まあ、凄い人なのは間違いないかな……」

ソウマの耳打ちに小さな声で答えていると、ヴィルフリートさんが俺達の方へ視線を向け、重みのある静かな声で言った。

「我が名はヴィルフリート。死せる者どもの執心を裁する者」

「……死せる者ども!?!」

「そうよ。この人――ヴィルフリートは死者を裁くの」

「そんな人が何でこの学園にいるんだよ……」

「我が公務の遂行のためである。」

……まあ、立ち話も疲れるだろう、その椅子に座るが良い」

俺達は静かに頷いてから、ヴィルフリートさんが指し示した椅子に座り、再び話を始めた。

「ところで、アンタも部活動を始めたわけ？」

「うむ……我はアオイの島などに伝えられる古典芸能、落語を研究する部活、落研を創部したのだ」

「……何を言ってるんだ、この人」

ソウマがわけが分からないといった顔をしている中、キヤトラが話を続けた。

「落語って何をするお笑いなの？」

「お笑い!? おい、今お笑いって言ったか!？」

「言ったわよ? ヴィルフリートはお笑いを研究する不死者の帝王様だもの」

「お笑いを研究する不死者の帝王……ダメだ、まったく意味が分からん……」

キヤトラの言葉にソウマが頭を抱え始めるが、それには構わずヴィルフリートさんが落語の説明を始めた。

「落語とは、オチのある話をする話芸である。」

例を挙げるならば、子供に長すぎる名前を付けて困る話、庶民が食べる魚を宮廷風に料理したらマズかった話などが名高い」

「そういう話をして、お客さんを笑わせるんですか？」

「然り。話芸が中心となる高度な芸ではあるが、この機に研究を深めることにした」

ヴィルフリートさんが説明を終えると、ソウマが顔を勢い良く上げながら大きな声を上げた。

「お笑いを研究して、どうするんだよ！」

「さつきも言ったけど、このオッサンはそういう人なのよ。だから、一々ツツコんでたら疲れちゃうわよ？」

「……そうかもな」

キヤトラの言葉にソウマが諦めたような顔で答えていると、ヴィルフリートさんがニヤツと笑いながら俺達に言った。

「お前達、今時間はあるか？」

「え？ はい、ありますけど……？」

「そうか。ならば、貴様らを相手に一席弁じようと思うのだが、どうだ？」

「えつと……つまり、落語を聴かせてくれるって事……よね？」

「その通りだ」

ヴィルフリートさんの言葉に俺達は一度顔を見合わせた後、ヴィルフリートさんの方

へ向き直ってから一斉に頷いた。その様子を見て、ヴィルフリートさんはニツと笑った後、落語を始めた。

「その日、酒場にや暇をもてあました冒険家達が管巻いておりますね。」

冒険家連中、話し込んでいる内に、それぞれ嫌いなものは何かってえ話になりまして。やれ俺は蜘蛛だとか、やっぱアクーアとか最近だとマッチョボードなんてのが怖いなんてね。

そんな連中のやり取りを、何とも手強そうな風体の冒険家が聞いて一言。

『情けないねえ、冒険家ともあろうものがモンスター風情を怖がるなんてなあ』などと申します。

冒険家達、これは面白くない。

『イヤイヤ百戦錬磨の戦士さん、お前さんだって怖い物くらいあるだろう』と詰め寄ります。

問い詰めてみますとその男、

『スタールーンが怖い』

等と申します」

「変わった物が怖いのね」

「そうだな」

キャトラとナギアが小さな声で話す中、ヴィルフリートさんはそのまま話を続けた。「男はスタールーンと口に出して気分が悪くなつたと言つて、近くの宿へと行つてしましました。」

暇な連中は顔をつきあわせてね、

何だかあの野郎、百戦錬磨だか知らねえがずいぶんいけ好かねえじゃねえか。ここはひとつ、あの野郎を怖がらせてやらにやあ気が済まねえ。

てなことになりました。

冒険家連中協力してスタールーンを稼ぎまして、それ男の部屋にどんどん投げ込んだ。

そうしてみると目の覚めた男、周りのスタールーンを見て、酷く怖がりました……こんなコワイ物みんな使つてしまおうつて言つて、スタールーンみんな使つてしまつた。

暇な連中、騙されたことに気付きました、

『おめえが本当に怖いものは何だ!』

と聞いたところ男は答えました。

『そんなじゃあここらで武器ルーンが怖い』

お後がよろしいようで」

そう言って締めると、ヴィルフリートさんは深々と一礼をした。

(……なるほど、これが落語っていうものなのか)

そう考えていると、ソウマがますますわけが分からないといった顔で声を上げた。

「……何だこりや」

「だから不死者を裁く人よ。その傍らでお笑いを研究してる、ね」

ソウマの言葉にキャトラが答えていると、ヴィルフリートさんが静かな声で今の落語についての説明を始めた。

「これは『スタールーンこわい』という落語である。洗練された諧謔が味わい深き一席だ。

……ところで、汝らは怖い物などはあるか？」

「私はゴーストが怖いです」

「そう言われると俺はムカデが怖いな」

「俺はやつぱりアクーアかな」

「俺はマツチヨバード……かな」

「アタシはカニカマが怖いわ！」

「もう、キャトラったら……カニカマは飛行島に帰ってからね？」

「はーい」

アイリスの言葉に返事をした後、キャトラはヴィルフリートさんに話し掛けた。

「それじゃあ、そろそろアタシ達は行くわね？ まだまだ他の部活も見て回らないといけないから」

「うむ。気が向いたときにはまたここへと来るが良い。無論、入部でも良いがな」

「はい。そして落語を聴かせていただきありがとうございます、ヴィルフリートさん」

「礼など良い。我が汝らに聴かせようと思い、一席弁じただけなのだから」

「分かりました。それじゃあ、失礼します」

「失礼します！」

「失礼します」

「失礼するわ！」

「失礼します」

そう言った後、俺達は落研の部室を後にした。

落研の部室を出た後、俺達は再び部室棟の中を話をしながら歩き始めた。

「それにしても、色んなやつがいるわよねえ」

「そうだな。それに冒険家について勉強する理由も、色々なんだろうしな」

「ふふっ、そうね」

キャトラ達の会話を聞きながら廊下を歩いていたらその時、廊下の向こう側からギターを背負ったザックが歩いてくるのが見えた。そしてザックは俺達が歩いてくるのに気付くと、微笑みながら俺達に話し掛けてきた。

「よう、お前ら。こんなところで何してんだ？」

「皆で色々な部活を見学してるんだ」

「へえー、そうなのか」

ザックがニツと笑いながら言うと、キャトラがザックの顔をジツと見ながら話し掛けた。

「部室棟にいるって事は、アンタも部活をやってるのよね？」

「そうだ。軽音楽部ってとこだな」

「でもアンタ、ギターとか弾けたっけ？」

「今のところ、ワンフレーズだけだけどな」

「ふうん。」

……ところで、ちよつと訊きたいんだけど、そのギターって……」

キャトラがギターを見ながら訊くと、ザックはそのままの調子で答えた。

「ちゃんと俺の金で買ったやつだぜ？ おかげで一文無しだけどな」

「アンタはいつつも一文無しでしょうが！」

ザツクの言葉にキヤトラが大きな声を上げていると、その様子を見てソウマが小さな声で話し掛けてきた。

「……ずいぶん軽そうな奴だな。財布も中身も」

「まあ、そうだな。でも、普段は革命軍のメンバーとして活躍してるから、腕は確かだぜ？」

「ほう……革命軍ねえ」

俺達が話をしていると、ザツクが何かを思いついた様子で話し掛けてきた。

「そうだ。お前らも、俺と一緒にバンドやらねえか？ 今のところ、俺しかメンバーがいねえんだよ」

「ワンフリーズしか弾けないのに、よく言うわ」

キヤトラがジトツとした目で見ながら言うと、ザツクは困ったような顔で返事をした。

「仕方ねえだろ、俺は物覚えが悪いんだよ。だから必死に練習中なんだ」

「ふーん。まあ、そういう事なら良いわ。アタシの場合、入部は無理だけど、応援はしてあげるわ」

「おう、ありがとうな！」

キヤトラの言葉にザックが嬉しそうにお礼を言っていると、その様子を見てアイリスが微笑みながら独りごちた。

「ザックさんも頑張っているんですね。私も何か部活を始めてみようかな」

それを聞き、キヤトラが俺達の方へと向き直った。

「そうね。アイリスはお裁縫の部活とかで、ナギア達は剣術の部活とかが良さそうよね」

「剣術の部活か……それなら、今度は運動系の部活でも見に行ってみるか」

「そうね」

キヤトラは返事をした後、再びザックの方へと顔を向けた。

「それじゃあ、アタシ達はそろそろ行くわ。練習頑張るなさいよ、ザック」

「おう、サンキューな！」

「皆も部活見学頑張れよ！」

「ああ」

ニツと笑いながら手を振るザックに見送られながら、俺達は運動部の見学をするために再び部室棟を歩き始めた。

第3話 部活動見学く運動部編十α

グラウンドへ出てみると、フランが他の生徒達と一緒に運動をしていた。

（あれって……たしかラクロスっていうスポーツだったな……）

「へえー、あの網が付いた棒でボールを取ったり投げたりするのね」

「みたいだな」

フラン達の様子をキャトラ達と一緒に眺めていると、フランが手に持った棒からボールを凄いスピードでゴールへと投げ込んだ。

「物凄いスピードだったね」

「だな。それにしても、みんなあんなスピードで投げられるもんなのかな？」

「うーん……どうなのかしらね。ラクロスの簡単な説明もかねて、ワイズに訊いてみましょうか？」

「そうだな」

キャトラに返事をしながら、俺はカバンの中からワイズを取り出した。

「ワイズ、ラクロスについて教えてもらっても良いか？」

『はい、畏まりました。』

ラクロスはクロスと呼ばれるあの網が付いた棒を使って、重さ150kgのボールを奪い合い、そしてゴールに入れた得点を競い合うスポーツです。競技人口もそれなりに多く、女性だけではなく、男性も行っているスポーツです。

尚、男子ラクロスはトッププレーヤーのシュートが時速160kmを越えることから、【地上最速の格闘球技】と呼ばれています』

【地上最速の格闘球技】……それに時速160kmって……」

「あはは……流石に速すぎるよな……」

ワイズの解説を聞いて、キャトラが驚きの声を上げ、ナギアが苦笑いを浮かべていると、フランが俺達の事に気付き、手を振りながら近付いてきた。

「ボンジュール！ モナーミ!!」

「あら、フラン。お疲れさま」

「えへへ、ありがとうでござる、キャトラ殿！」

キャトラの言葉にフランが嬉しそうにお礼を言っていると、アイリスが微笑みながらフランに話し掛けた。

「フランさん、ラクロス出来たんですね」

「いやー……実は、ラクロス部に入るまでやったことがなかったでござるよ」

フランが頬を掻きながら言うと、キヤトラが意外そうな顔をしながら答えた。
「あら、そうだったの？ でもそれにしても様になってたわよ？」

ね、ナギア」

「ああ。それに、見てるこつちまで楽しくなってくるほど、楽しそうにやってたしな」
「オーララ〜……」

恥ずかしいでござるよ〜……」

キヤトラ達の言葉を聞いて、フランが頬を赤く染めている中、ソウマはラクロスの試合をジツと見つめていた。

「ラクロスねえ。何だか元気の良いスポーツみたいだな」

「ああ、そうだな」

ソウマの言葉に返事をしながらラクロスの試合を観ていたその時、ソウマが不思議そうな顔をしたかと思うと、突然フランの方へと顔を向けた。

「どうかしたの？ ソウマ」

キヤトラが不思議そうに訊くと、ソウマはフランから視線を外さずに俺達に質問をしてきた。

「……この子は双子なのか？」

ソックリなのが試合に参加してるみたいなんだが……？」

「双子って、フランが……?」

「ああ……いや、ちよつと待て」

そう言うと、ソウマは再びラクロスの試合の方へと顔を向けた。俺達もそちらへ顔を向けてみると、そこにはフランと同じ姿をした生徒が二人おり、さっきまでのフランと同じように楽しそうにラクロスをしていた。

「あー……なるほど。そういう事ね」

キャトラが納得した様子で言う中、ソウマは更にわけが分からないといった顔をしながらフランの方へと向き直った。

「……アンタは三つ子、なのか……?」

「プルクワ? 違うでござる! あれは……」

フランが説明をしようとしたその時、試合終了を告げるホイツスルの音が鳴り響いた。そしてそれと同時に、試合に参加していたフラン達の姿が白い煙を残して消えた。

「おおおっ!」

「あー……やっぱりそうだったのね」

フラン達が消えた事にソウマが腰を抜かしそうな程に驚いている中、キャトラは静かな声で言った後、フランの方へと顔を向けた。

「やっぱりあれって、アンタの分身だったのね」

「ウイ！ その通りでござる！」

フランが微笑みながら返事をしていると、ソウマが驚いた顔のまままでフランに話し掛けた。

「……まさかアンタ、本物の忍者なのか？」

「そうでござるよ。これはお近づきの印の洋ナシでござる！」

「サ、サンキュー……」

ソウマはフランから洋ナシを受け取ると、とても小さな声で俺達に話し掛けてきた。

「……なあ、この洋ナシはどこから出て来たんだ？」

「どこからって言われてもな……」

「実は、俺達もよく分かってないんだよ、その洋ナシがどうやって出てきてるかが……」

「そう、なのか……世界は本当に広いな……」

ソウマは呟くように言った後、難しい顔で洋ナシを見つめ始めた。

（……まあ、この件については考えてもしょうがないし、そろそろ次の部活動でも見に行
くか）

そう思い、皆に声を掛けようとしたその時だった。

「えっほ、えっほ、えっほーい！」

そんな掛け声を口にしながら、ミラが農具などを背負ってグラウンドへと走ってき

た。

「……アンタ、何してんのよ?」

その様子を見て、キャトラが不思議そうに訊くと、ミラは背負っていた荷物を地面へと降ろしながら返事をした。

「何って……園芸部なんだから、畑を作るに決まってるじゃない?」

「畑って……何の畑を作るつもりなんだ?」

ナギアが首を傾げながら訊くと、ミラは額の汗を首に掛けていたタオルで拭きつつ答えた。

「小豆の畑よ」

「小豆って、あの餡子とかにする小豆?」

「そうよ、小豆よ!」

「このグラウンドを小豆畑にするのよ!」

ミラはグラウンドの方へ体を向けると、グラウンド全体に響き渡るほど大きな声で言った。

(……全部を小豆畑にするって……流石にカムイ学長も首を縦には振らないと思うんだけどな……)

苦笑いを浮かべながらそんな事を考えていると、キャトラが少し驚いた様子でミラに

話し掛けた。

「もやしって小豆の芽だったの？」

「それだけじゃないけど、大豆だったり、エンドウ豆だったり……まあ、だいたい豆ね」
「つまり、もやしはお豆の芽だったんですね」

「ええ。せつかくもやしに拘るからには、豆から拘りたいもの。」

……さて、それじゃあ早速……！」

ミラが農具を持って作業に取り掛かろうとすると、フランがジトツとした目でミラを見ながら声を掛けた。

「ミラ殿……グラウンドを掘り返しちやダメでござるよ？」

「えっ！　　そ、そうなの……？？」

「ウイ、当然でござる」

フランが静かに返事をしながら頷くと、ミラは辺りをキョロキョロと見回した後、
「あく……そ、そうなんだ……」

ひゅーん、ひゅひゅひゅーん……」

目だけそっぽを向きながら、口笛を吹いているように声を出し始めた。

「……口笛、吹けてないわよ」

「うっ……い、良いのよ！　　そんな事は！」

ミラは怒ったように言ったが、すぐにガクツと項垂れると、落ち込んだ様子で呟くように言った。

「はあ……そうになると、また色々と考え直さなきゃ無いわね……」

すると、フランがゆつくりとミラへと近付き、そのまま隣に立つと、肩をポンポンと叩きながら優しい声で言った。

「ミラ殿、大丈夫でござる。セツシヤも一緒に小豆を植えるのにちようど良いところを探してあげるでござるよ」

「フラン……でも、良いの？」

「ウイ！ もちろんでござるよ、ミラ殿！」

フランがニコニコしながら言うのと、ミラの顔がぱあつと輝き始めた。

「フラン……！　ありがとう……！」

「えへへ、どういたしましてでござる♪」

ミラからのお礼の言葉に、フランは嬉しそうな表情で答えた。

「ミラさん、元気になったみたいだね」

「うん」

アイリスとキャトラが微笑みながら話をしていると、ミラが拳をギュツと握りながらフランに大きな声で話し掛けた。

「よし……！」

それじゃあ、早速探しに行くわよ、フラン！」

「ウー！」

……と言いたいところでござるが、先にラクロス部の片付けをしないとイケないでござるよ……」

「ああ、それならあたしも手伝ったげるわよ。フランにだけ手伝ってもらうのも何か悪いからね」

「メルシーでござる！ ミラ殿！」

「どういたしまして。」

それじゃあ、早速片付けをしに行きましようか」

「ウー！」

ミラはフランの返事にコクンと頷いた後、俺達の方に顔を向けた。

「そういや、アンタ達って部活動見学中だったわよね？」

「ああ、そうだけど……」

「さつきここに来る途中でなんだけど、体育館でソフィを見掛けたわ」

「ソフィさんって事は……新体操部の活動だな」

「たぶんね。まあ、興味があったら行ってみると良いと思うわ」

「分かった。ありがとうな、ミラ」

「どういたしまして。それじゃあね」

「サリユーでござる、みんなー！」

そう言つて、ミラとフランはラクロス部の部員達の所へと歩いていった。それを見送つた後、俺は皆に声を掛けた。

「よし……それじゃあ、情報ももらったことだし、早速体育館に行つてみるか」

「おうー！」

「うん」

「オツケーー！」

「ああ」

そして俺達は、新体操部の活動を見に行くべく体育館へと向かった。

体育館に着いてみると、中から凄い大きな歓声が聞こえてきた。

「何だかスゴい盛り上がってるわね？」

「だな。とりあえず、中に入つてみよう」

ナギアの言葉に頷いた後、俺達は体育館の中へと入った。中ではソフィさんが流れて

いる音楽に合わせて、華麗な演技を披露していた。

「ふふ、ソフィさん素敵ね」

「ああ、そうだな」

アイリスとナギアが微笑みながら、ソフィさんの様子について話を始めた。それを聞きながらふと周りを見てみると、腕を組みながらソフィさんの演技をジッと見つめているクライヴさんの姿が目に入ってきた。

俺はクライヴさんのところへ近付き、小さな声で話し掛けた。

「クライヴさん、さっきぶりですね」

「……ん？ ああ、お前達も来ていたんだな」

「はい。クライヴさんはどうしてここに？」

「何だか騒がしかったのでな、自主的に体育館の警備をしていたんだ」

「なるほど」

俺達が話をしていると、ナギア達も俺達の所へと歩いてきた。

「こんにちは、クライヴさん」

「クライヴさん、こんにちは」

「やつほー、クライヴ」

「よお、クライヴさん」

「ああ、こんにちは」

クライヴさんが皆の挨拶に返事をしていると、キャトラがニヤツと笑いながらクライヴさんに話し掛けた。

「ところでクライヴ。さつきソフィの事をジツと見てた気がするんだけど？」

「そ、そんな事はない！ 断じてそんな事は！」

「ふ〜ん……？ まあ、それならそれで良いんだけどね〜？」

キャトラがニヤニヤと笑いながら、クライヴさんに返事をしていると、流れていた音楽が止み、周りの生徒達が拍手を始めた。

(どうやら話してる内にソフィさんの演技が終わってたみたいだな)

そんな事を考えていると、演技を終えたソフィさんがゆっくりと俺達の所へと歩いてきた。

「皆さん、ごきげんよう」

「お疲れさま、ソフィ。それにしても凄い人気ね」

「はい。皆さんに演技をご覧頂いて……私、とても嬉しいです」

キャトラの言葉を聞いて、ソフィさんが穏やかな笑みを浮かべながら返事をしていると、その様子を見たソウマが小さな声で話し掛けてきた。

「何か気品のある人だな。どこかのお嬢様なのか？」

「王女様よ？ 氷の国の」

「王女!? 本当なのか!？」

ソウマが驚きながら訊くと、ソフィさんは静かに頷いた。

「その通りです。ですが、学園内ではあくまで一人の生徒ですので、お気になさらないで下さいね」

「あ、ああ……」

ソフィさんが微笑みながら言うと、ソウマは少し戸惑ったような返事をしながら頷いた。

(……まあ、気持ちはわかるけどな)

ソウマの様子に苦笑いを浮かべつつ、ふとクライヴさんの方を見ると、クライヴさんは真剣な顔でソフィさんのことを見ていた。

「クライヴさん、どうかしたんですか？」

「……ん？ ああ、いや……何でもない」

口ではそう言いながらも、クライヴさんはソフィさんの事をジッと見つめ続けた。
た。

(うん……これは完全に惚れてるな。けど……)

当のソフィさんはそれに気付いている様子は無く、ニコニコとしながら俺達に話し掛

けてきた。

「皆様も、新体操をやってみませんか？ 体を動かすのは楽しいですよ！」

「新体操ねえ……：そういうえば、さっきのリボンをくるくるつてやるの、中々素敵だったわね。思わずじやれつきたくなつちやつたわ」

「ふふ、ありがとうございます、キャトラ様。新体操はリボンだけでなく、こういつたこん棒やロープも使うんですよ」

ソフィさんが近くに置いてあつたこん棒やロープを手に持ちながら説明をしてくれていると、その近くに置いてあつたボールを持ちながらソウマが訊いた。

「このボールも使うのか？」

「はい。ちよつとお借りしますね」

ソフィさんはソウマからボールを受け取ると、華麗にボールを操りながら演技を見せしてくれた。

「スゴい……：まるでボールが生きてるみたい……」

「これはたしかに凄いな……」

アイリス達が演技についての感想を言っていると、演技を終えたソフィさんが額の汗を拭いながらニコツと笑つて答えた。

「私など、まだまだです。これからもつと研鑽を積まなくてはなりませんから」

(……ソフィさんのこの姿勢、俺も見習わないとな)

そう強く決心した後、ふとクライヴさんの事を見てみると、クライヴさんは未だにソフィさんの事をジツと見つめていた。その様子を見て、キヤトラが呆れたような顔でクライヴさんに話し掛けた。

「……クライヴ、また目移りしてるわけ？」

「そんな事は無い。ただ、新体操に興味が出来ただけだ」

「ふ〜ん。まあ、良いけどね」

キヤトラ達が話をしていると、それを聞いていたソフィさんが顔をばあつと輝かせながらクライヴさんの両手を取った。

「嬉しいです、クライヴ様！ 早速レオタードに着替えましょうー！」

「クライヴのレオタード姿……ねえ」

ソフィさんの言葉を聞いて、キヤトラが呟くように独りごちていると、クライヴさんが静かな声で話し始めた。

「ソフィ殿、貴女のお言葉は大変嬉しく思っておりますが、風紀委員としての勤めが少々残っておりますので、本日のところは辞退させて頂きます」

「クライヴ様……」

ソフィさんは静かな声で呟いた後、ニッコリと笑いながら返事をした。

「分かりました。それでは、クライヴ様と共に演技が出来る日を楽しみに待たせて頂きますね」

「はい。」

「……では、俺はこれで……」

クライヴさんはソフィさんに深々と一礼をした後、ゆっくりした足取りで体育館の入口へと歩いていった。そしてクライヴさんが体育館から出ていった後、キャトラが俺達に話し掛けてきた。

「さてと……それじゃあ、そろそろ部活動見学に戻りましょうか」

「ああ。まだ見てない部活もあることだしな」

「うん。」

「……あ、そうだ」

そう言った後、キャトラはソフィさんの方へと顔を向けた。

「せっかくだから、ソフィも私達と一緒に来ない？」

「え……でも、よろしいのですか？」

「ええ。ねっ、みんな」

キャトラの言葉に俺達は静かに頷いた。

「皆様……」

俺達の様子を見て、ソフィさんは眩くように言った後、ニッコリと笑いながら言葉を続けた。

「分かりました。それでは、よろしくお願いいたしますね」

「うん！」

キヤトラが元気良く返事をする、ソフィさんは周りに置いてある道具達を見ながら静かに口を開いた。

「それでは、先にこの道具達を片付けてしまいますので、少々お待ち下さい」

「あ、それならアタシ達も手伝うわよ？ みんなでやれば早く終わるでしょうし」

「そう……ですね。分かりました。それでは皆様、よろしくお願いいたします」

「はい、任せて下さい」

「それじゃあ、早速作業開始よ！」

キヤトラの言葉に頷いた後、俺達はソフィさんと一緒に新体操の道具を片付け始めた。

新体操の道具を片付け終えた後、俺達はソフィさんと一緒に部室棟の周りを歩き始めた。

「さて、次はどこに行こうか」

「そうだな……」

俺とナギアが次の行き先について話しながら周りを見回していたその時、プールが目に入ってきた。

（プールか……：そういうえばさつきカモメが水泳部に入ったって言うてたし、ちようど良いかもしれないな）

プールを見ながら教室での会話を思い出した後、俺は皆に声を掛けた。

「よし……それじゃあ、次は水泳部に行ってみるか」

「水泳部……：そういうえば、教室でカモメが水泳部に入ったって言うてたもんな」

「そうね。それにせつかくプールが目の前に見えるのに行かないのもアレなものね」

「そういう事だ。ということ、早速行こうか、皆」

こうして俺達は、水泳部の部活動見学のためにプールへと向かった。

プールに着いてみると、そこには水中に足を付けながらプールサイドに座っているカモメの姿があった。

「よっ、カモメ」

ナギアが片手を上げながら声を掛けると、カモメは俺達の方へと顔を向けた。そしてスクツと立ち上がると、綺麗な敬礼をしながら挨拶を返してきた。

「これはナギア船長！ それに皆さまも！ お疲れさまであります！」

「やつぱりここにいたのね。カモメ上等兵」

キヤトラがカモメに近づきながら言うと、カモメは得意そうな顔で返事をした。

「ふつつつつ……キヤトラ航海士、私はもう上等兵ではないでありますよ？」

「おつ？ その顔はもしかして……？」

「また昇進されたんですか？」

キヤトラ達が訊くと、カモメはとても嬉しそうな顔で返事をした。

「そうなんです！」

ですので、今日から私の事はカモメ伍長とお呼び下さい！」

カモメは勢いよく敬礼をしながら言った後、何かを思いついたような顔で言葉を続けた。

「あ、そうだ。せっかくですので、皆さんも泳いで行かれませんか？」

「そうだな……とりあえず、今日の所は見学だけさせてもらおうかな」

「了解であります！ リオス副船長！」

俺の言葉に元気良く返事をした後、カモメはプールの方へと体を向けた。

「それではカモメ伍長、発進致します！」

「ヨソーロー！」

カモメが勢いよくプールへと飛び込み、そして凄まじい水飛沫が上がったかと思うと、凄いい速さでプールの往復し、そのままゴールした。

「はやっ！」

「流星は帝国海軍の伍長、凄いい速さね」

ソウマとキャトラが今の泳ぎについての感想を述べていると、カモメはゆつくりとプールサイドへ上がってきた。

「ふう……中々タイムが縮みませんね。もっと、スタートのフォームを変えた方が良くもありません」

「そんだけ速いのに、まだタイムを縮めるつもりなのか？」

ソウマが不思議そうな顔で訊くと、カモメは頷きながら返事をした。

「はい、バシヨウカジキに追いつくのが私の夢ですから」

「バシヨウカジキって……たしか魚の中でも泳ぐのがかなり速い奴だよな」「はい。もう少しで追い付けそうだったんですが、ダメだったんですよね」

「そ、そうか。アンタならきつと……追い付けるだろうぜ」

「ありがとうございます！ ソウマさん！」

顔を引きつらせながらいうソウマの言葉に、カモメは元氣良く返事をした。

（何というか……カモメなら無くはない気がするんだよな。バシヨウカジキに追い付くとか）

そんな事を考えていると、突然カモメが両手をポンツと合わせながら声を上げた。

「あ、そうだ！」

「どうした？ カモメ」

「たしかナギア船長とリオス副船長は海の近くに住んでらっしゃいましたよね？」

「まあ……海の近くといえば、海の近くだよな」

「へへっ、だな。それに体力を付けるために、一応水泳とかもやってたしな」

「そうだな」

俺達の話を知ると、カモメは顔をばあっと輝かせた。

「それでしたら、水泳部はいかがですか！ もちろん、他の皆さんでも大歓迎です！」

「水泳部か……」

「水泳も良いかもね、全身運動だし」

俺達が話をしていると、ソフィさんが微笑みを浮かべながら話に入ってきた。

「私は寒中水泳しかしたことがないので、プールの授業が楽しみですな」

「寒中水泳……さすがは氷の国ね」

「氷の国は名前の通り、とっても寒いんですよ?」

「はい、普通の国の冬が私の国の真夏くらいです。でも氷の家の中はあつたかいですし、温泉もあるのでとても良い国なんですよ?」

「寒中水泳の後の温泉……! 良いですね! 機会がありましたら、お伺いしますね!」
「ふふつ。はい、お待ちしてます」

ソフィさんとカモメが楽しそうに話をしていたその時、カモメがふとプールへ目を向けると、何かに気付いたように声を上げた。

「……おや? プールの中に何かが落ちてますね」

「え?」

「なになに、何が落ちてるの?」

「ちよつと見てきますね。」

……はっ!」

カモメは掛け声と共にプールへ飛び込むと、そのままの何かへ向けて潜っていった。

「ぶはっ!」

そしてそれから程なくして、カモメはカニのような物を手に持って水面から顔を出した。

「これは何なのでしょうか？」

「さあ……どことなくハンマーのようにも見えませんが」

「カニのようなハンマーねえ……」

カニのような物について話をしていると、カモメが再び何かに気付いたように声を上げた。

「あれれ？ まだ何かあるようですね」

カモメはカニのような物をプールサイドに置くと、再び水中へと潜っていった。

「このプール、色んな物が沈んでるのね」

「そうだな。それに今の感じだと、見た目よりもだいぶ深そうだな」

「そうね」

キヤトラとソウマがプールについて話をしていると、再びカモメが手に何かを持って

水面から顔を出した。

「これが沈んでいました！」

「カニの缺っぽい物に魚の骨っぽい物みたいね」

「誰かの食べ残し、でしょうか……？」

「食べ残しでしたら、このプールは海と繋がってることになるな」

「海と繋がってるって、そんな馬鹿な……」

俺達が話をしていると、カモメはまた何かに気付いたように声を上げた。

「まだ何かありますね」

そしてカモメは持っていた物をプールサイドに置くと、三度水中へと潜っていった。

「本当に色んな物が沈んでるわね」

「だな。それにしても……こんなに色んな物が沈んでるなら、プールの授業をやる前に

皆で掃除した方が良くもしれないな」

「そうですね」

俺達がプールを覗き込みながら話をしていたその時、突然水面が泡立ち始めた。

（え……今度は一体何が沈んでるんだ？）

不思議に思っていた次の瞬間、俺達の目の前に巨大な岩を両手で支えているカモメが姿を現した。

「何で岩なんか沈んでんだよ!？」

ソウマが驚きの声を上げていると、キャトラ達が不思議そうな顔で岩を見始めた。

「……あれ？ 何かその岩、見たことある気がするんだけど……」

「たしかにこんな岩を必死に壊したような……?」

「こんな岩みたいなのを必死に守った気もするよな……?」

ナギアとアイリスが不思議そうにしている中、俺は鞆の中のワイズに話し掛けた。

「……ワイズ、あの岩ってどこかで見たことあるよな？」

『はい……私の記憶が正しければ、ピレント島で見た物に似ているかと』

「ピレント島か……」

（そういえば、そんな事もあったな……）

ピレント島での出来事を思い出していたその時、

「とりあえず、この岩は片付けちゃいますね」

カモメが軽い調子で言いながら、両手で支えていた岩を海の方へと放り投げた。そして岩が落ちた瞬間、とても大きな水飛沫が上がり、その辺りにだけまるで雨が降っているかのように水飛沫が降り注いだ。

「あんな岩を放り投げるって……アイツ、どんな腕力してるんだよ……」

驚いた様子でソウマが独りごちている中、カモメが満足げにプールから上がってきた。

「ふう……さっきの岩でプールの中に沈んでいた物は全部みたいです」

「お疲れさまです、カモメさん」

「ありがとうございます、アイリス機関長」

アイリスの言葉に敬礼をしながら答えた後、カモメは俺達の方へと顔を向けた。

「さて……話を戻しますが、水泳部はいかがでしょうか？」

「良い部活だとは思うけど……」

「もう少し色々と見たり考えたりしてから決めようかな」

俺とナギアが答えると、カモメは少し残念そうな顔になった。

「そうですか……でも、皆さんの入部は待っていますので、ご検討の程、よろしく願います！」

「ああ、分かった」

カモメに静かな声で答えた後、俺は皆に声を掛けた。

「よし……それじゃあ、次の部活動を見に行くか」

「おう！」

「うん」

「オツケー！」

「ああ」

「はい！」

そして俺達はカモメに別れを告げ、プールを後にした。

「さて、ここまで色々な部活を見てきたわけだけど……」

「色々ありすぎて、逆に決まらないな……」

「だな……」

ソウマの言葉に俺はため息をつきながら答えた。

プールを出発した後、俺達は様々な部活動を見学していたが、どの部活に入るか未だに決められずにいた。

（別に必ず入らなきゃないわけでは無いけど、せっかくだから何かの部活には入ってみたいんだよね……）

夕暮れの空を見上げながら考えていると、ソフィさんがナギア達に話し掛けた。

「ナギア様とアイリス様とキャトラ様はどの部活動に入るか決めましたか？」

「えっと、ここまで色々と見てきたんですが……私はお裁縫が好きなので裁縫部を創部しようかと思っています」

「それじゃあ、俺も裁縫部にしようかな。アイリスがやってたの見て、前々から興味はあったし」

「アタシもアイリス達と一緒に裁縫部にするわ！ 裁縫は出来ないけど、マスコット枠としてなら問題は無いからね！」

「ふふっ、たしかにキャトラ様がマスコットなら人気が出そうですね」

「えええ！ この招きキャトラ様にお任せよ！」

ソフィさんの言葉にキヤトラが胸を張りながら答えた。

(皆は裁縫部か。俺も一緒にしたいところだけど……それも何か違う気がするしな……)

皆と一緒に歩きながらそんな事を考えていたその時だった。

「それでは、私はここで失礼致しますね」

茶熊学園の女子寮の前に着いた時、ソフィさんが微笑みを浮かべながら俺達にそう言った。

「うん、分かったわ。今日は付き合ってくれてありがとうとね、ソフィ」

「いえ、私も皆さまと一緒に色々な部活動を見ることが出来てとても楽しかったです」

「そっか。それなら良かったわ」

「ふふ、はい」

キヤトラの言葉に小さく笑いながら答えた後、ソフィさんは鞆を持ち直してから言葉を続けた。

「それでは皆さま、また明日です」

「はい、また明日です、ソフィさん」

「ソフィさん、また明日！」

「また明日です、ソフィさん」

「まったねー！」

「それじゃあな、ソフィさん」

俺達が挨拶を返すと、ソフィさんは静かに一礼をした後、ゆつくりと女子寮の方へと歩いて行った。そしてそれを見送った後、キヤトラがソウマの方へ顔を向けた。

「さて、アタシ達はネロを迎えに行くけど、アンタはどうする？」

「そうだな……せつかくだし、俺もついていくぜ。あの竜―ネロとはまだあまり話してないからな」

「オツケー！ それじゃあ、早速行きましょうか」

キヤトラの言葉に頷いた後、俺達はネロが待っている竜舎へ向けて歩き出した。

竜舎に着いた後、俺達は竜舎の中へと入り、ネロが入っている部屋まで歩いた。すると、ネロは部屋の中で静かに寝息を立てていた。

(まあ、だいぶ待たせちゃってたし、仕方ないか)

そんな事を考えた後、俺はネロの体を揺さぶりながら声を掛けた。

「ネロ、そろそろ帰るぞ」

「(……ん？ ああ、お前らか……)」

「ああ、待たせてすまなかったな、ネロ」

「いや、別に良いぜ？ 昼飯を食ってからずっと寝てたからな」

「あはは、そっか」

ネロの言葉に小さく笑いながら答えつつ、俺はネロを部屋から出した。

（よし……これでいつでも帰れるな）

そんな事を考えていた時、ナギア達の話が耳に入ってきた。

「やっぱりリオス達が一緒にいるのを見ると、何か落ち着くわね」

「あはは、たしかにそうだな」

「私達にとつては、リオス達が一緒にいるのがもう当たり前みたいなものだもんね」

（ネロと一緒にいるのが当たり前、か。たしかに俺が部活を決める基準の中で、最優先に

なつてたのはネロの事だったもんな……）

そんな事を思っていたその時、俺はある事を思いついた。

（……そうだ。これなら問題は無いはずだ。そして後は……）

その事について考え始めたその時、

「……リオス？ どうかしたのか？」

そんな声が聞こえたため、顔を上げてみると、ナギア達が不思議そうな顔で俺の事を

見ていた。

（そうだ、ナギア達にも一応話しておくか）

そう考えた後、俺は思い付いた事をナギア達に話した。ナギア達は俺の話の話を聞くと、少し驚いた様子を見せたものの、すぐに微笑みながら賛成をしてくれた。

(よし……それじゃあ、飛行島に帰ってからこの案について纏めていくか)

そう思った後、俺は皆に声を掛けてから竜舎を出た。

翌日、俺達は最初の授業が始まる前に学長室へと向かった。そして学長室の扉を二回ほどノックすると、

「はーい、どうぞー」

というカムイさんの声が聞こえたため、俺達はゆっくりと扉を開けて中に入った。

「失礼します、カムイ学長」

「おや、リオスさん達ではないですか。学長室に何かご用事ですか?」

「はい。俺とアイリスで別々の部活動を創部しようと思ったので、その書類と後はナギア達の入部届をもらいに来ました」

「ほう、創部ですか。因みにどんな部活動を作るつもりなんですか?」

カムイさんに訊かれ、まずはアイリスがそれに答えた。

「私は裁縫部を作ろうと思っています」

「ほほう、アイリスさんは裁縫部ですか」

それで、リオスさんはどんな部活動を？」

そう訊かれ、俺は静かな声で昨日思い付いた事を話し始めた。

「俺は騎竜部を作ろうと思っっています」

「騎竜部……ですか？」

「はい。」

まず、カムイ学長もご存じの通り、俺にはネロという相棒の黒竜がいますよね」

「はい。最初は見た目のインパクトからちよつと身構えてしまいましたが、実際に話してみると中々気さくな方なんですよね」

「はい。ですが、俺はまだアイツの事、正確には竜についてまだまだ知らない事が多い気がしたんです」

「なるほど。たしかに竜と一口に言っても、様々な種類がいますからね」

「それでアイツともつと仲良くなるため、そして竜についてもつとよく知るため、更には他のドラゴンライダー達が自分の相棒について知るための場所が必要だと思ったんです」

「つまり、リオスさんのようなドラゴンライダーの人達が自分の竜などについて学ぶための部活動という事ですね？」

「理由の半分はそうですが、もう半分は他の人達にも竜について知ってもらう機会を作るためです」

「他の人達にもですか？」

「はい。竜の国の人達のように、自分達の生活の中に竜という存在が根付いている人達もいますが、一般的に竜は恐れられたりする事が多いです」

「たしかに、ギルドからの討伐依頼の対象となっていたりしますしね」

「はい。もちろん、ネロのような竜もいるのですが、一般的にみれば竜は少し怖い物だと思われがちなのが現状です。」

そこで、この部活動内で竜の生態や種類などといった情報を集め、そしてそれを何かしらの機会で発表することで竜について様々な人達にも知ってもらいたいと思ったんです」

（竜について色々な人達に知ってもらう事で、竜のイメージの向上にも繋がる反面、竜の鱗とかを手に入れるために、竜狩りの真似をしようとする人、もしくは竜狩りに依頼しようとする人だつて出てくるかもしれない。）

けれど、そういう人だけじゃなく、竜を守ろうとしてくれる人だつて増えるかもしれない。

そう考えたからこそ、俺はこの騎竜部を立ち上げようと思ったんだ。もうあんな事

を、ラピユセルの母竜の時のような悲劇を生み出したくないから)

そう考えながら、俺はジツとカムイ学長の事を見つめた。カムイ学長は腕を組みながら少し考えた後、俺達の顔を見ながら静かな声で話し始めた。

「分かりました。アイリスさんの裁縫部、そしてリオスさんの騎竜部の創部を認めましょう」

「ありがとうございます、カムイ学長」

「ありがとうございます」

俺とアイリスが頭を下げながら言うと、カムイ学長は朗らかに笑いながら返事をした。

「ほっほっほ、二つとも認めない理由がありませんから。それに……」

カムイ学長は俺の方に顔を向けてから言葉を続けた。

「リオスさんの騎竜部は、これから入ってくるであろうドラゴンライダーの生徒さんのためにもなりますしね。」

リオスさん、アイリスさん、期待してますよ?」

「はい」

俺達の声を揃えて返事をする、カムイ学長は机の引き出しを開け、中から二枚の書類を取り出した。

「こちらが創部届です。こちらに部活動の名称や創部時点の部員名や部員数といった必要事項を書いて、書き終わりましたら私に提出して下さいね」

「分かりました」

俺達は返事をした後、一枚ずつ創部届を手を持った。

(これで騎竜部が創部出来るけど、必要な物はまだまだあるし、ここからが大変だな……)

創部届を見ながら考えていたその時、学長室のスピーカーから予鈴の音が鳴り響いた。

「おや、もうそんな時間でしたか」

カムイ学長はスピーカーを見ながら独りごちた後、俺達の方へと向き直った。

「それでは、リオスさん、アイリスさん。授業、頑張つて来て下さいね」

「はい」

声を揃えて返事をした後、俺達は静かに学長室を出た。そして授業を受けるために、教室へと急いだ。

第4話 創部準備と新入部員

「うーん……」

その日の昼、俺は自分の机の上にある創部届を見ながら唸っていた。

(さて……どうしたもんかな)

そんな事を考えながら唸り続けていると、後ろの方からナギア達に声を掛けられた。

「どうしたんだ、リオス？」

「何か悩み事？」

「ん……まあ、ちよつとな」

(……まあ、考えるのは後ででも良いか)

俺は静かに答えながら創部届を机の中にしまった。そして席を立ちながら、ナギア達に話し掛けた。

「とりあえず、俺達はネロのここに行ってくるから、皆は先にカフェテリアに行ってくれ」

「ああ、分かった」

ナギアの返事に静かに頷いた後、俺は制服のポケットにワイズを入れ、ネロが待つ竜舎へ行くために教室を後にした。

竜舎に着いた後、俺は静かに竜舎の中へと入った。そしてネロが入っている部屋まで歩いていくと、ネロは静かに寝息を立てて眠っていた。

(今日も寝てるな……やっぱり気軽に飛び回れない分、やる事があまりないからなのかもしれないな……)

ネロの事を見ながらそんな事を考えていたその時、ネロが静かに目を開けた。

「ん……ああ、リオスカ」

そしてネロは体を上へグーツと伸ばしてから言葉を続けた。

「(お前がいるって事は、もう昼か)」

「ああ、そうだよ。今、準備するからちよつと待っていてくれるか？」

「(おう！)」

ネロの返事を聞いた後、俺はネロ用の水桶を手に取り、一度竜舎を出た。そして園芸部や外の運動部が使っている水道を使い、水桶に満タン近くまで水を注いだ。

(よし……こんな所だな)

それを確認し、俺は再び竜舎へ向けて歩き始めた。そして竜舎の中に入り、ネロのところへ戻って来た後、俺はネロの目の前に水桶を静かに置いた。

「今、昼飯の方も準備するから、先に水でも飲んでてくれ」

「(おう、分かったぜ!)」

ネロが水桶の中の水を飲み始めたのを確認した後、俺はネロ用の皿を手に取り、竜舎の隅に保管しているネロ用の食糧へと近づいた。そして適量を皿へと盛った後、俺はそれを水桶の横へと静かに置いた。

「お待たせ、ネロ」

「(おう、サンキューな、リオス)」

ネロが静かな声で言った後、食糧を食べ始めると、俺はそれを眺めながら考え事を始めた。

(……やつぱり、ここまでの準備が終わるまでには、それなりの時間が掛かってるし、食糧の保管方法も少し杜撰な気がする。となると……)

俺が顎に手を当てながら更に考え込み始めようとしたその時、ふいにネロが頭を上げて俺に話し掛けてきた。

「(……リオス、何か悩み事でもあんのか?)」

「悩み事……まあ、そんなところかもな」

「ふーん……んで、何を悩んでんだ？」

「……騎竜部の事についてだよ」

「(騎竜部の……?) 何か悩むことでもあったか?」

俺の言葉を聞くと、ネロは不思議そうに首を傾げながら訊いてきた。俺はそれを眺めながら、静かな声で話し始めた。

「騎竜部では、他のドラゴンライダーの生徒達の相棒の世話も請け負う事にしてるんだけどさ。もし、それを本当にやるなら、色々足りないものがあるんだよ」

「(足りねえもの……?)」

「ああ。まず、部員達が竜などについて学ぶための資料を置いたり、お前達に何かあった時に待機しておくための部室、お前達用の食糧を置いておく食糧庫、それとお前達用の給水設備に水道設備とかもだな」

「(……なるほど。けど、水道設備とか食糧庫に関してはカムイに頼んでみりゃあ良いし、部室も部室棟の空室を使ったりすりゃあ良いんじゃないのか?)」

「水道設備とか関してはそうするつもりだし、部室についても最初はそれでも良いとは思ったんだけどさ。ただ、さっきも言った通り、お前達に何かあった時の事を考えると、やっぱりこの竜舎に近ければ近いほど良いんだよ」

「(……なるほどな)」

「それに研究用の資料収集とかもあるし、やる事は山積みなんだよな……」

「まあ、そうだろうけどなあ……リオス、流石に一度ナギア達にも相談してみたらどうだ？ 三人寄れば何とかの知恵って言葉もあることだしな」

「ナギア達にか……そうだな、時間がある時にでも相談してみるよ」

「おう、そうしとけそうしとけ。」

……さて、お前もそろそろ飯食いに行つてこいよ。まだ時間はあるかもしれないけど、のんきにしてつとすぐに時間が無くなっちゃうからな」

「それもそうだな。」

それじゃあ、俺達はそろそろ行くよ」

『次は放課後に来ますね、ネロ』

「(おう!)」

ネロの返事を聞いた後、俺達は竜舎を出て、銀鮭カフェテリアに向かって歩き始めた。

銀鮭カフェテリアに着いてみると、少し数は少なくなっているものの、それでもまだ昼食中の生徒達で賑わっていた。

(さて……まずはナギア達を探さないと)

そう思い、俺がカフェテリア内を見回そうとしたその時、後ろの方から声を掛けられた。

「おーい、リオス——！」

振り向いてみると、そこにはナギア達の姿があつたが、何故かナギアの手には小さな四角い竹籠が、そしてアイリスの手には水筒のような物があつた。

(……なんで竹籠、それに水筒なんて持つてるんだ?)

俺がその事を疑問に思っていると、ナギア達が俺へと近付きながらホツとした様子で話し掛けてきた。

「ようやく会えたな、リオス」

「まったく……竜舎にいないから、どこに行つたのかと思つたわよ」

「すまなかつたな。さつきまで竜舎でネロと話してたんだが……どうやら俺達がここに来る途中で行き違いになつたみたいだな」

「そのようだな。俺達もついさつき竜舎でネロから話を聞いて、ここに戻つてきたからな」

「そっか。」

……とところで、ナギアが持つてるその竹籠とかは一体どうしたんだ……?」

俺が竹籠を指差しながら訊くと、ナギアが竹籠の中を俺に見せながら答え始めた。

「これか？ これはお前の昼飯のおにぎりだよ、リオス」

「俺の……？」

「うん。リオスが来るのがちよつと遅いからって事で、竜舎まで届けるために、グリーズさんに作ってもらったの」

「中の具も色々あるみたいだし、食べながら楽しめると思うわ」

「それに水筒に入ったお茶もあるしな」

「皆……ありがとうな」

俺がお礼を言うと、皆はニコツツと笑ってから言葉を続けた。

「ふふつ、どういたしまして」

「よし……とりあえず、中庭にでも行こうぜ、リオス」

「あそこならたぶん落ち着いて食えるはずだからな」

「分かった。それじゃあ、早速行こうか、皆」

「おう！」

「うん」

「ええ！」

「ああ」

そして俺達は、中庭に向けて歩き始めた。

中庭に着いてみると、時間的な事もあるせいかな、俺達以外の生徒の姿はあまり見当たらなかった。

(ここつてこの時間だとこんなに静かなんだな……)

俺が周りを見渡ししながら考えていると、突然ナギアが何かを指差しながら声を上げた。

「おっ、あつたあつた。皆、あのベンチに座ろうぜ！」

ナギアが指差す方を見てみると、そこには三人掛け程度の大きさのベンチが二基ほど設置されていた。俺達はナギアの言葉に頷いた後、そのベンチへと近づき、各自で好きなようにベンチへと座った。

(ふう……なんかようやく座った気がするな)

座りながらそんな事を考えていると、ナギアとアイリスが持っていた物を渡してくれた。

「ほい、リオス」

「はい、リオス」

「ありがとうな、ナギア、アイリス」

ナギア達にお礼を言った後、俺は竹籠の蓋を開け、中に入っていたおにぎりを一つ手に取り、それを口に運んだ。

（これは……普通の塩むすびか。シンプルではあるけど、それはそれで良いもんだな）
そんな事を考えながら食べていると、ナギアが何かを思い出したような顔で訊いてきた。

「そういえば、ネロが言ってたんだけど、騎竜部について何か悩み事があるんだよね？」
「……まあ、悩み事といえば悩み事か。」

実は……」

俺はネロに話した内容と同じ事をナギア達にも話した。

「……なるほどな」

「確かに食糧庫とかに関しては、カムイに頼んだ方が良いかもしれないけど……」

「問題は部室についてね……」

俺の話聞いた後、ソウマ達が真剣な顔で考え始める中、ナギアだけは何かを思いついた様子で話しはじめた。

「いや……部室に関しては、問題無いと思うぜ？」

「え？ それって、どういう……？」

キヤトラが不思議そうな様子で訊くと、ナギアはニツと笑いながらそれに答えた。

「無ければ建てれば良いんだよ、部室をさ！」

「部室を……」

「建てる……？」

ナギアの言葉を聞いて、ソウマとアイリスが不思議そうな顔になった。俺はその様子を見ながらナギアに話し掛けた。

「部室をというよりは、部室として使うための建物を建てるって事だろ？」

「その通り。たしか竜舎の横ってスペースが空いてたよな？」

「そういえば……竜舎の両脇って空き地みたいになってたわね」

「もちろん、カムイ学長に訊いてからにはなるけど。もし良いんだったら、そこに部室なり食糧庫なりを建てれば良いんじゃないかなと思ってるさ」

「なるほどな……」

（これは盲点だったな……やつぱりネロの言う通り、皆に相談して正解だったみたいだな。こうなれば早速、放課後にカムイ学長に訊きにいかないと……）

俺が静かに考えていると、キャトラがナギアに話し掛けた。

「でも、もし良かったとしても、建てるための材料とかはどうするのよ？」

「それは……まあ、訊いてみてから考えても良いんじゃないか？」

「それもそうね」

そしてキャトラは俺の方に顔を向けると、手の中の竹籠を見ながら話し始めた。

「ほら、リオス。考えるのは後にして、まずはそれ食べちゃいなさい?」

「そうだな」

(まあ、たしかに今考えてもしょうがないし。キャトラの言う通りここは早く食べてしまおうか)

そして俺は一度考える事を止め、竹籠の中のおにぎりを再び食べ始めた。

その日の放課後、俺は教室でナギア達と別れた後、カムイ学長がいる学長室へ向かって歩いていった。そして学長室の前に着き、ドアを二回ほどノックすると、

「はいはい、どうぞお入りください」

というカムイ学長の声が聞こえたので、俺はドアノブをゆっくりと回しながら学長室の中へと入った。

「失礼します、カムイ学長」

「おや、リオスさんでしたか。」

「……という事は、もしかして騎竜部についてですか?」

「はい、少しご相談したいことがあったので」

「ふむ……分かりました。それでその相談したいこととは?」

「それは……」

俺は騎竜部について考えていること、そして昼にネロやナギア達と話した内容をカムイ学長に話した。

「……なるほど。水道設備などの設置に、空き地になっていいる箇所への食糧庫や部室の建造、それに竜などについての資料の収集ですか……」

「はい」

「ふむ……なるほどなるほど……」

カムイ学長は顎に手を当てながら、視線を天井に向けつつ数分程度考え事をし始めた。そして俺に視線を戻すと、カムイ学長は静かに話し始めた。

「……実はあの空き地みたいになっている所には、飼育小屋を作る予定があるのですが……」

「飼育小屋……ですか？」

「ええ。今すぐにという事では無いのですが、近い内に生徒の皆さんの憩いの場の一つになるようにと思って、飼育小屋を作る事にはしているんですが……」

もし、飼育小屋を作ったとしても、まだまだあの辺りには空きスペースが出来てしま
うんですよね」

「……！ それじゃあ……！」

「ええ。是非その空きスペースを使って、騎竜部の部室や食糧庫を建てちゃってください

い。空きスペースをそのままにしておくのも、少し忍びなかったですから」

(良かった……これで第一段階はクリアだな)

俺はカムイ学長の言葉にホッとした後、カムイ学長の目を見ながらお礼を言った。

「カムイ学長、ありがとうございます」

「いえいえ。先程も言いましたが、空きスペースをそのままにしておくのも少し忍びなかったですからね。それにこれから入ってくるドラゴンライダーの生徒さん達の事を考えれば、そのくらいやっておいた方が良いでしょう」

「とすると、後は……」

「ええ。水道設備や資料の収集については部室が出来てからでも良いのですが、問題はどうかやって部室や食糧庫を建てるか、ですね……」

「はい……」

(うーん……こうなったら他の生徒達にも手伝ってもらおうか……)

俺達が部室などの建て方について考え始めたその時、廊下の方から何やら賑やかな声がか聞こえ始めた。

「……おや？ 何やら廊下の方が賑やかですね」

「そうですね。何人かの声の他に……星たぬきの鳴き声も聞こえるような……」

そんな事を話している内に、その声は徐々に学長室へ近付いてきた。そして声が学長

室の前で止まった瞬間、学長室のドアが静かにノックされた。

「はい、どうぞー」

カムイ学長が声を掛けると、学長室のドアがゆつくりと開いた。そして中に入ってきたのは、ナギア達と飛行島の大工星たぬき達だった。

「皆……それに大工星たぬき達も……一体どうしたんだ？」

「実はリオスが教室を出ていった後に、皆でどうやって部室とかを建てるかについて話をしていったの」

「それしたら、ナギアが大工星たぬき達に頼んだら良いんじゃないかって思い付いてね。それで急いで飛行島に戻って、この子達を呼んできたのよ」

キャトラの言葉と同時に、大工星たぬき達がキューキューと鳴き声を上げた。

（大工星たぬき達か、たしかに適任かもしれないけど……）

「でも、大工星たぬき達は飛行島の建築作業もあるだろ。それに材料だって……」

「あ、それなら問題ないみたいだぜ？」

「え？」

ナギアの言葉に疑問を覚えていると、大工星たぬき達が次々にキューキューと鳴き声を上げ始めた。

（う……相変わらず星たぬき達の言葉は分からないな……）

「キャトラ、通訳を頼んでも良いか？」

「まっかせなさい！えーと……」

『いつもリオスさんやネロ君にはお世話になってるから、僕達は喜んでお手伝いするよ！』

『飛行島の建築作業の方は最近落ち着いているから、特に問題はないしね！』

『それに建築用の材料も飛行島用として多めに買ってもらってる分を使うつもりだから心配はいらないよ！』

『だから僕達にどーんと任せてよ！』

……だつてよ、リオス？」

「皆……」

俺は皆の事を見回した後、ニコツと笑つてから言葉を続けた。

「ありがとうな、皆」

『どういたしまして！』

皆は笑顔で言葉を返してくれた。

（皆がいてくれて、本当に助かったな……）

そんな事を考えていると、カムイ学長が楽しそうに笑いながら話し掛けてきた。

「ほっほっほ、これなら本当に問題は無いみたいですね、リオスさん」

「はい、皆がいてくれて、本当に良かったです」
「そうですね」

それじゃあ、星たぬきさん達にはこれを―あの空き地に建てる予定の飼育小屋についての情報を渡しておきますね」

カムイ学長は大工星たぬき達に飼育小屋の設計図などを渡した後、俺の方に視線を戻した。

「部室などが建て終わりそうな時には、僕に報せて下さいね。それに併せて、水道設備などを設置しようと思いますので」

「分かりました。それじゃあ、俺達はこれで失礼しますね」

「はい。それでは皆さん、頑張ってくださいね♪」

『はい!』

カムイ学長に声を揃えて返事をした後、俺達は揃って学長室を出た。そして騎竜部の部室などの建築計画を立てるために、俺達の教室へと向かった。

それから数日間、俺は昼休憩や放課後を使って、ナギア達と内装や外観などについて相談をしながら、部室などの建築計画を立てた。そして計画を立て終えた後は、皆で飛

行島から材料を運び出し、大工屋たぬき達と一緒に部室などの建築に励んだ。

（皆に……）まで頑張ってもらってるんだ、絶対に完成させてやる……い！）

そんな思いを胸に秘めながら、俺は皆と一緒にひたすら部室の建築を続けた。

そしてそれから更に数日後、

「……………よし、完成だ！」

俺は完成した騎竜部の部室、そして食糧庫の前に立ち、大きな声を上げた。すると、皆も嬉しそうな声を上げ始めた。

（ふう……………皆のおかげでようやく完成したな……………）

額の汗を拭いながら考えていたその時、

「おつ、完成したんだな、部室！」

ネロが竜舎の中から出てきながら、俺に声を掛けてきた。俺はニツと笑いながらネロに言葉を返した。

「ああ、皆が手伝ってくれたおかげだな」

「（へへっ、そうだな。それに俺がこうして勝手に出てこれるのも星たぬき達が部屋の扉を変えてくれたからだしな）」

「そうだな。前までは外からしか開けられなかったけど、今度からは中から開け閉めできるようにしたし、かなり便利にはなったんじゃないか？」

「おう！ もちろんだぜ！」

俺がネロと話をしていると、ナギア達や星たぬき達が次々と俺達へと近付いてきた。そして皆が近くに来了ことを確認した後、俺は皆の事を見回しながら大きな声で声を掛けた。

「皆、今日までお疲れさま。皆のおかげで無事に騎竜部は活動を始めることが出来るよ。だから改めて言わせてくれ……皆、本当にありがとう」

俺が頭を下げながら言うと、皆が次々と言葉を返してくれた。

「リオスやネロは大切な仲間だから、手伝うのは当然だよ。なつ、みんな」
「うん。それに私達も楽しかったから」

「滅多にこんな事なんてやらないもんね。たまにはこういう経験を試してみないとね」
「まったくだ。今回は良い勉強になったぜ」

「皆……」

皆の言葉を聞き、俺が呟くように言っていると、突然ネロが楽しそうな声を上げた。
「(さあて……ソウマ、そろそろ良いんじゃないか?)」

「……ネロ。ああ、そうだな」

ソウマはニツと笑いながらネロに言葉を返すと、俺に声を掛けてきた。

「リオス、ちよつと創部届を貸して貰えるか?」

「創部届を……？ まあ、良いけど……」

俺が創部届をソウマに手渡すと、ソウマは制服のポケットからペンを取り出し、サラサラと何かを書き始めた。そして書き終わると、ソウマはペンをしまってから創部届を俺に返してきた。

「サンキューな、リオス」

「あ、ああ……」

俺は返事をしながら創部届に目を向けた。すると、今まで俺の名前しか書いていなかった創部届の部員名簿欄にソウマの名前が書き込まれていた。

「ソウマ、これって……」

「ああ、見ての通りだぜ？ リオス部長？」

ソウマはニツと笑いながら言った後、右手を差し出しながら言葉を続けた。

「という事で、これからよろしく頼むぜ、リオス」

「ソウマ……ああ、こちらこそよろしくな！」

「ああ！」

俺達が握手を交わしていると、キャトラが少し不思議そうな様子でソウマに話し掛けた。

「それにしても……何でソウマは騎竜部に入ろうと思ったの？」

「ああ、それはな……せつかくこういう学校に来たからには、他では出来ない事をやりた
いと思ったから。そして騎竜部の創部についてリオスから話を聞いたり、創部の手伝い
をしながら時々ネロと話したりしてる間に、竜つて生き物に興味が湧いたからだよ」

「なるほどね。因みにネロがこの事を知ってたのは何でなの？」

「(んー……まあ、事前に聞いてたからな。それにソウマからリオスの驚く顔が見てみた
いから、部屋とかが完成するまで、この事は皆には黙つて欲しいって言われてしな)」
「……なるほどな」

ネロの言葉に俺はフツと笑いながら答えた。

(ソウマの狙い通り、たしかに驚いたけどな。でもソウマが竜に興味を持つてくれたの
は嬉しいし、騎竜部に入ってくれた事はとっても助かるかな)

そんな事を考えた後、俺はネロとワイズとソウマに声を掛けた。

「ネロ、ワイズ、ソウマ。色んな人に竜について知ってもらうために、そして俺達も竜に
ついて知るためにこれから皆で頑張っていくぞ」

「(おうよー)」

『はこ』

「ああー」

俺の言葉にネロ達は声を揃えて返事をした。

（この皆のためにも、そしてあの時のような事を起こさないためにも、これから本当に頑張らないとな）

皆の事を見ながらそう思っていると、キャトラが何かを思い出したように声を上げた。

「あつ、そういうえばカムイに部室とかが建て終わりそうな時には報せてくれって言われてなかったっけ？」

「……そういえばそうだったな」

（作業に集中しすぎてすっかり忘れてたな……まあ、創部届も出さないといけないし、今から学長室に行ってくるとするか）

俺は自分のペンを取り出し、創部届で唯一埋まっていなかった活動場所の欄をササツと埋めた後、ソウマに声を掛けた。

「よし……それじゃあ、ソウマ……いや、ソウマ副部長も一緒についてきてくれるか？」

「……ああ、もちろんだぜ、リオス部長」

俺達はニツと笑い合った後、皆の方に顔を向けた。

「それじゃあ、今から行ってくるよ。皆、その間留守番を頼んでも良いか？」

「ああ、もちろんだぜ！」

「待つてる間、皆でお掃除してるね」

「後で騎竜部創部記念のお祝いをしてあげるから、早めに帰ってきなさいよ？」

「ああ、分かった」

「それじゃあ……」

「行ってきます」

声を揃えて言った後、俺達は騎竜部のこれからについて、期待に胸を膨らませながら学長室に向けて走りだした。

第5話 強いられる学びと悩める生徒

ある日の事、冒険家養成学校〔私立茶熊学園〕の生徒の一人であるソウマ・ホクト・バスクナは、クラスメート達がいる教室を離れ、校舎の隅で一人佇んでいた。

「やれやれ……ここは本当におかしな学校だな。」

……まあ、そのおかげで、報告することに事欠かないんだけどな……」

ソウマは静かに独りごちると、制服のポケットからペンと小型のノートを取り出した。

「さてと、まずは……飛行島の面々だな。」

飛行島の主にしてお人好しな赤髪の剣士のナギア、銀髪で物静かな魔導師のアイリス、カニカマが好物の喋る白猫のキャトラ。

そして飛行島のもう一人の主にして、賢者のルーンのワイズと黒竜のネロを所有している、我らが騎竜部の部長のリオス……つと」

飛行島に住むメンバーの情報を書き終えると、ソウマは自身が今書き終えた情報を真剣な表情で見返した。

そして見返し終えると、小さくため息をつきながら独りごちた。

「はあ……やっぱり飛行島の奴らだけでもだいたいバラエティに富んでるな……」

何でここは、こんなにも面白おかしい人材ばかりが揃ってるんだ……?」

ソウマはその事に少しだけ呆れた様子を見せながらも、再びノートに茶熊学園内で特に目立つ生徒の情報を記しだした。

「他に報告をするなら……悪魔だけどシスターのミラ・フェンリエッタ、お笑いの探求をしている不死者の帝王のヴィルフリート・オルクス。」

んで、お調子者だけどわりと面倒見の良さそうな銀髪のザック・レヴィン、花の都の島出身の忍者のフラン・ポワリエ。そして氷の国の王女様のソフィ・R・ファルク、帝
国海軍の伍長のカモメ・ナルミ。

それとバルラ王国騎士団の騎士のクライヴ・ローウエルに熊なのにこの学園の学長のシペ・コロ・カムイ……と。

まあ……だいたいこんなところか」

ソウマは静かに独りごちると、ノートとペンを制服のポケットへとしまい、すぐ後ろの壁に自分の体を預けるようにして寄りかかった。

「……最初はこんな学校調べてどうすんのかと思つたが——こんなメンツが揃ってるわけだし、この学校にはたしかに何かあんのかもな」

麗かな日差しの中、ソウマはこの学園に隠されている秘密について考えながら、時折吹いてくる爽やかな風を心地良さに感じていた。

すると、グラウンドがある方角から、生徒達の楽しそうな声がチラホラと聞こえ始めた。

「……そういや皆、冒険家として活動しながら勉強やらクラブやらにやたら頑張ってるよな……」

まあ、そう言う俺も何だかんだで騎竜部の副部長なんてのに収まってるわけだが……」

そんな事を考えていた時、ソウマはふと以前いた学校の事を思い出した。

「<スクール>にいた頃の俺はしゃかりきだったが……この連中の場合は、なんというか……目標に向かって頑張ってるって感じがするんだよな……」

晴れ渡る青空を見上げながら、ソウマは羨ましそうな様子で独りごちた。

すると、

「……お前、こんなところで何をボーツとしてるんだ？」

ソウマの横から少し不思議そうに訊く声が聞こえた。向いてみるとそこには、ソウマのクラスメートであり、学校内の風紀委員を務めているクライヴの姿があった。ソウマはクライヴの姿を認めると、穏やかな様子で話し掛けた。

「……なんだクライヴさんじゃないか。こんなところで何をしてるんだ？」
「それはこちらの台詞だ。こんなところでポーツとして……」

もしかして、気分でも悪いのか？」

「いや、ちよつと考え事をしてただけだから問題ないぜ」

「そうか」

ソウマの言葉を聞き、クライヴは少し安心した様子を見せると、今度はソウマが少し不思議そうに問い掛けた。

「クライヴさんこそ……こんなところで何をしてたんだ？」

ひよつとしてパトロールかなにかか？」

「そんなところだ。さつきこの辺りに妙な魔物がいるのが見えたのでな。お前も気をつけ……」

クライヴが言い掛けたその時、二人の目の前に複数の小さな魔物が現れた。ソウマはその姿を見ると、不思議そうに首を傾げた。

「……もしかして、あのサングラスを掛けたリーゼントの星たぬきがその妙な魔物か？」

「ああ、そうだ」

ソウマ達が妙な魔物——不良星たぬき達について話をしていると、

「キュツキュキューー！」

「キュキューキュキュキュー！」

不良星たぬき達は威圧をするように鳴き声を上げ、そして肩を怒らせるような動き方でソウマ達へピヨピヨと向かってきた。その様子を見た瞬間、クライヴの顔が真剣なものへと変わった。

「どうやら俺達からカツアゲをするつもりらしいな」

「ふーん……」

で、どうするんだい、クライヴさん。金払って許してもらおうか？」

ソウマが入学式の日にかムイから受け取った双剣―シヤケノセイバーを構えながら訊くと、クライヴは―白銀に輝くナツクルダスター―プラチナブレイヴを装着しながら静かに答えた。

「生憎だが、コイツらに払う金はない。最近は儉約をしてるんでな」

「気が合うねえ。」

「じゃあ、一つ勉強させてもらおうか！」

「ああー！」

そしてソウマ達は、自身の武器を陽の光で煌めかせながら不良星たぬき達へ向けて走り出した。

ソウマ達が不良星たぬきとの戦闘を始めて数分後、不良星たぬき達はソウマ達の強さに恐れをなし、揃って一目散に逃げ出していった。その姿を見ながらソウマは額に浮かんだ汗をそっと拭った。

「ふう……何とかなつたみたいだな、クライヴさん」

「ああ。この腕章が輝く限り、学園の風紀は乱れはしないさ」

「ははっ、そうだな。」

……にしても、アイツらと戦って思ったんだが、この島のモンスターは気合いが入ってるよな」

「ああ。奴らなりに、強さを磨いているような印象だったな」

「まあ、ここは学校なんだし当然かもな」

ソウマは校舎を見上げながら答えた後、クルツとクライヴの方へと振り向いた。

「それにしても、クライヴさんも結構やるよな。流星は騎士でありこの学校の風紀委員ってとこだな」

「ははっ、ありがたいな。だが、まだまだ修行中の身だ、もっと精進せねばな」

「そうかい。まあ、無理せずに頑張れよ?」

「ああ、分かってるさ。」

さて……」

クライヴは静かに言いながら、グラウンドの方へと体を向けた。

「今度はこつちの方を見回ってみるとしよう。」

ではな、ソウマ」

「あいよ、お疲れさん」

ソウマの返事を聞いた後、クライヴはピシツとした様子でグラウンドの方へと歩いていった。

そしてその様子をソウマが静かに眺めていると、突然ソウマの腹部から大きな音が鳴り出した。

「……動き回ったせいかな、腹が減ったな。リオス達には悪いが、部活に行く前にちよつと食堂にでも行って、腹ごしらえでもしてくるか」

ソウマは心の中でリオス達に詫びた後、食堂の方角へ向けて歩き出した。

「さあて……何を頼もうかな」

ソウマが食堂へ向けて歩きながら、注文するメニューについて考えつつ、中庭に差し掛かったその時だった。

「……ん、あれは……ザックか」

ソウマの目にクラスメートであるザックの姿が映った。ザックは中庭のベンチに座りながら、少し苛立った様子で何かを読んでいるようだった。

「ふむ……ザックが何読んでるか気になるし、ちよつと声でも掛けてみるか」

ソウマは方向を変えると、静かにザックへと歩き始めた。

「おい、ザック。何を読んでるんだ？」

ソウマが歩きながら声を掛けると、ザックはスツと本から顔を上げた。そしてソウマの姿を認めると、片手を上げながら言葉を返した。

「おつ、ソウマじゃねえか。こんなところにいるなんて珍しいな」

「お前こそそうだろう？ それで、何を読んでたんだ？」

「ん？」

「……ああ、これだよ。メンズナイツだ」

ザックが手にしていた本―メンズナイツをソウマへと見せると、ソウマは表紙に写っている人物に目を留めた。

「これは……もしかしてクライヴさんか？」

「ああ、そうだけ？」

ザックの返事を聞くと、ソウマは少し感心した様子で呟いた。

「あの人、雑誌の表紙になるほど有名な人だったんだな……」

「へへっ、まあそうだな」

「……なんというか、人は見かけによらないな。」

また一つ、勉強になつたぜ」

ソウマが呟くように言つたその時、

「べん……きよう……」

ザックがボーツとした様子でその言葉だけを繰り返した。

そのザックの様子にソウマが不思議そうな表情を浮かべた。

「ザック……？ どうしたんだ、いきなりボーツとなんかして」

「あ、いや……帰って明日の予習をしなきゃねえなと思つてさ」

「……予習？ 見た目と違って、お前さんも真面目なんだな」

ソウマが感心したように言うと、ザックは頬をポリポリと掻きながら答えた。

「いや……別にそういうわけじゃないんだけどさ。なんかこう……急に勉強しないと
なあつて気分になつてさ」

「急に……だど？」

「ああ。」

「そんじゃあ、そういうわけだから、また明日な」

「あ、ああ……」

ソウマが答えると、ザツクはニツと笑った後、男子寮の方角へ向けて歩いていった。その様子をジツと見ながら、ソウマは先程のザツクの発言に少し引つかかりを感じていた。

「急に勉強をしたくなった、か……」

それが本当だとすれば、この学園でだいぶ厄介な事が起きてることになるな。

……大事にならないと良いんだけどな……」

自分の他には誰もいなくなった中庭で、ソウマは不安そうに呟く事しか出来なかった。

騎竜部が活動を開始してから一週間が過ぎた頃、俺は行間を利用して、自分が持っている道具、【竜の横笛】についての情報をノートに纏めていた。

（えーと……【竜の横笛】が奏でる音色には、竜の気持ちを落ち着かせる効果が見られるが、その効果には個体差があり……と）

スラスラと【竜の横笛】についてノートに書き込んでいたその時、隣の席に座っているナギアが話し掛けてきた。

「リオス、それは……？」

「ん？」

ああ、これは騎竜部で使ってる資料用のノートだよ」

俺がノートを見せながら言うのと、ナギアは興味深そうな様子でノートを見始めた。

「へえ……こんなものまで作ってるんだな」

「ああ。色んな人に竜について知ってもらうためには、まず自分達が竜について知る必要があるからな」

「ははっ、たしかにそうかもな」

ナギアが楽しそうに笑っていると、

「ふふっ、何だか楽しそうね」

「なにになに？ 何の話？」

「何かあったのか？」

それを聞いたアイリス達が話に混ざってきた。

「いや……色んな人に竜について知ってもらうためには、まず自分達が竜について知る必要があるよなって話だよ」

「たしかに知らない人に教えられても不安なだけだもんね」

「そういう事だ。」

……それに」

俺はエクセリア達と出会った時の事を思い出しながら言葉を続けた。

「……もう竜の事で後悔をしたくないからな」

「リオス……」

「うん……そうだね」

その時の事を思い出し、俺達が少ししんみりとした様子で話をしていると、ソウマが心配そうな様子で話し掛けてきた。

「……何か、あったのか？」

「まあ……ちよつとな。だからこそ、俺は竜についてもっと見識を深めたいんだ。そしてそれで得た知識とかを何かしらの機会を使って、世界中の人達に発信して、竜についての印象を良い方に変えたい。そしてゆくゆくは竜達と人間達が共存出来るようになって欲しいんだ。」

「……まあ、邪竜とか竜狩りみたいに今の時点ではどうにも出来ないことはあるけど」

「なるほど、な……」

ソウマは静かな声で言った後、ニツと笑ってから言葉を続けた。

「そういう事なら、いっそう頑張って活動をしていかないとな。話を聞く限り、リオスの

最終目標はだいたい果てしないみたいだからな」

「ソウマ……」

「お前達に出会うまで、竜にまったく触れてこなかった俺なんかでよければ、出来る限り力を貸すぜ？」

リオス部長」

「……ソウマ、ありがとうな。」

まだまだ始まったばかりだけど、これからもよろしく頼むぜ？

ソウマ副部長」

「ああ、任せとけ」

ソウマの返事を聞いた後、俺達はニツと笑い合った。

（ソウマの言う通り、目指す目標までは果てしなく遠い……）

でも、ネロやエクセリア達、そして竜について理解を持つてくれている人達のためにも、俺達の出来る限りのやり方で頑張っついていかなないとな）

俺が心の中で強く決心していると、突然ソウマが何かに気付いたように声を上げた。

「……ん？　　そういえば、ナギアも机の上に色々と広げてるけど、それは……参考書とノートか？」

「ああ。さっきの授業の後、何か急に授業中に分かりづらかったところを復習したく

なってるな」

「ふーん……」

急に、ね……」

「でも、何だかナギアにしては珍しいわよね？」

「あはは、自分で言うのもアレだけど、たしかにそうかもな」

キャトラの言葉にナギアは笑いながら答えた。

（まあ、勉強に精を出すのは悪いことでもないし、良いとは思うけどな）

少し口元を綻ばせながらナギア達の様子を見ていた時、ドアを通ってカムイ学長が教室に入ってくるのが目の端に見えた。

（おっと……もうそんな時間か）

そしてカムイ学長の姿を見て、他の皆が急いで席に着くと、カムイ学長はのんびりとした声で話を始めた。

「えー……この時間は本来、別の授業なのですが、時間割を変更して自由学習の時間にするように思います。」

ですので、各自好きな勉強をして頂いて構いません」

「あら……それならカムイは、その間は何をするのよ？」

「私は皆さんが勉強している様子を見せてもらいながら、何か質問をしたい時のために」

待機してますよ」

「ふーん……まあ、そういう事なら助かるわね」

「まあ、本当は一人で学長室にいるのは暇だったからなんですけどね！」

「本音はそれかい！」

カムイ学長の言葉にキヤトラが強いツツコミを入れたが、カムイ学長はのんびりとした声のままにそれに答えた。

「いや……ね？　仕事とかはあるんですよ？　ちゃんと。」

でもそれだけだと、やっぱり息が詰まっちゃいますので、こうして学長として皆さんの勉強風景を眺めようと思ったわけです」

「むむむ……思ったよりも真つ当な言葉が返ってきたわね……」

それにそういう事なら、納得するしかないし……」

「ありがとうございます、キヤトラさん。」

ということで、皆さん。早速自由学習の方を始めちゃって下さい」

カムイ学長の言葉に揃って返事をした後、俺達は各々好きな勉強をし始めた。

(じゃあ俺は……さっきの騎竜部の資料ノートでも纏めるか)

そして俺は再び騎竜部の資料ノートや部活動のためにエクセリア達の協力により作成した簡単な竜についての資料などを広げた。

エクセリアとゲオルグさんは入学こそしていないものの、この茶熊学園や騎竜部については教えてあるため、この前話をした際には見学に来てみたいと言っていた。

(エクセリア達との学園生活か……)

うん、絶対に良いものになるって確信できるな)

そしてナギア達やエクセリア達との学園生活について考え込みそうになったが、俺はすぐに頭を切り換えた。

(……つと、今はとりあえずこっちに集中しないと……)

えーと……竜の国のドラグナー達は……)

すると、教室のあちこちからカムイ学長に質問をする声が次々と上がり始めた。

「学長殿！ 質問です！」

「はい、何ですか、カモメさん？」

「七海戦争の原因と、世界に与えた影響についてお聞かせ願いたいのですが」
か

「緑の島の領有権を巡る、三つの大国の陰謀とその失敗が原因。

混乱と内戦の激化がその結果ですよ、カモメさん」

「ありがとうございます、学長殿！」

「学長先生、このコードが上手く弾けないんだが」

「そのコードは手首を前に突き出すようにしてネックを掴んでみると良いかと」
「なるほど、こんなもんか」

「学長どの〜ここでこの公式を使う意味が分からないでござるー……」
「どれどれ……」

フランさん、相変わらず直感だけで答えを導いていますね。それで正解してるから怖いですが、ハイ」

「式を使うのは苦手でござる〜……」

「学長様。ルーン工学におけるソウルの近接作用とは何ですか？」

「ソウルの媒介が、局所的な相互作用によってなされる、近代魔法理論の基礎的な考え方です」

「『アイレンベルクの基礎定理』ですな！」

「その通りです。」

「それにしても……」

カムイさんは真剣に勉強に取り組む皆の様子を見ながら言葉が続けた。

「皆さん、ずいぶん勉強熱心ですな？」

「そういえば……そうですな」

（いつもならちよつと私語があつたりするのにな……）

皆の様子に少し不思議に思っていると、ぼそつと呟くソウマの声が聞こえた。
「やっぱり何か妙だな……」

まるでみんな、何かに急かされているみてえだ」

(急かされている……そう言われれば、そんな気も……?)

その時、

「……ふほっ……ふおおおっ」

廊下の方から苦しそうな声が聞こえたと思つたら、本を両手いっぱい抱えたミラが入ってきた。

するとその瞬間、皆の視線がミラに集中した。

(あれ、ミラいなかったんだ。

それにしても……凄量の本だな)

苦笑いを浮かべながら、ミラの様子を見てみると、突然ミラが何かに躓いた。

「……あつ!」

そしてミラは、手に持っていた本と一緒に倒れ込むと、皆が次々と真剣な表情で席から立ち上がった。

「お、おい! どうしたんだ!」

ソウマが声を掛けながら急いで駆け寄りミラの体を揺さぶった。

すると、ミラは躓いた事の痛みを感じていない様子で、声を震わせ始めた。

「……はあああ……止めないで！」

勉強！ 勉強しなきゃ！」

「……何言つてんだ、アンタ？」

「アタシは、もやしの全てが知りたいの！」

「もやしの全て……」

つて、アンタボロボロじゃないか。一体どうしたんだよ」

「三日三晩寝ないで勉強しただけよ！」

「まだまだ行けるわ！」

（いやいや……三日三晩寝ないで勉強してたら、普通は寝込むだろ……）

ミラの言葉に俺が心の中でツツコミを入れてみると、ソウマがため息をつきながら静かな声でそれに答えた。

「落ち着け、シスター。」

「アンタ、布教は良いのかよ？」

「……布教？」

「そうだ、布教だよ」

ソウマが話をしながらミラを助け起こすと、ミラは困惑したような表情を浮かべなが

ら小さな声で呟いた。

「……そうだったわ。」

アタシ、布教しなきゃだわ。

何で、モヤシの事ばかりを……？」

「……とりあえず、保健室に運ばねえとな。」

リオス、ちよつと手伝ってくれるか？」

「分かった。」

それじゃあ、カムイ学長。行つてきます」

「は、はい……」

そして俺は、ソウマと一緒にミラを保健室へと運んだ。

ミラを保健室へと運んだ後、俺達は教室へ戻りながらさっきのミラの様子について話をしていた。

「ミラ、様子が変だったよな……」

「ああ、それに他の奴らも少し変だったしな」

「たしかに……」

(ミラほどじゃないにしろ、他の皆も勉強に熱心すぎる気がした。

……何か、嫌な予感がするな)

俺がこの状況について考えていると、ソウマが何かを思い出したように声を上げた。

「……そういや、リオスはみんなほど勉強に集中してる感じがしなかったよな？」

「え……そうだったか？」

「あ……もちろん、悪い意味じゃないぜ？」

みんなが机にかじり付いてるのに対して、リオスだけはいつも通りな感じがしてな」

「あ、なるほど」

(けど、特に何かをした覚えもないしな……)

うーん……謎が深まるな……)

皆の様子、そしてソウマの言葉について考えている内に、俺達は教室へと戻ってきていた。

すると、ナギアとアイリス、そしてキャトラが心配そうな様子で近付いてきた。

「リオス、ソウマ。ミラは？」

「とりあえず保健室の先生に任せてきたから、後は大丈夫だと思う」

「そう。」

でも……ミラったら、どうしたのかしらね？」

「勉強に熱が入りすぎたんだろうよ。

あれはちよつと行き過ぎなようだがな」

「うん……そうね」

アイリスが心配そうな様子で答えると、ソウマは他の皆の事を見ながら小さな声で呟いた。

「……それにしても、ここのみんなってすげえよな。

俺もまだまだ勉強が足りなかったみたいだ」

「たしかにみんなが色々すごいのは認めるけど、アンタはアンタで頑張れば良いんじゃないの?」

「いや……それだけじゃなくてさ、自分が今まで見てきた世界の狭さに愕然としてるんだよ」

「うーん……若いんだし、世の中知らないのは当然よ。

そんなに気負わずに、普通の学園生活を楽しんでみたら?」

その時、キャトラの言葉にソウマの顔が一瞬強張ったが、すぐに哀しそうな表情へと変わった。

「普通の学園生活ね……」

俺にはそれが分からないんだよ」

「ソウマ……」

その時、授業の終了と昼休憩を告げるチャイムがタイミンク悪く鳴り出した。すると、ソウマはクルツと踵を返しながら小さな声で言った。

「ちよつと風に当たってくるから、先に飯に行つてて良いぜ。

じゃあな」

そしてソウマは静かに教室を出て行つた。

(ソウマ……)

「……えつ、アタシマズいこと言つちやつた……?」

「たぶん、な……」

「ソウマさん、何だか哀しい顔してたね……」

「ああ……」

(あの様子、ソウマの過去に何かあったのは間違いない……)

よし、やつぱり追いかけよう)

そして俺は皆に声を掛けた。

「皆、ちよつと行つてくる」

「行つてくるって……ソウマの居場所は分かるの?」

「確証はない……でも、今日まで一緒に勉強したり、部活したりしてたから、何となくは

分かる気がする」

「……分かった。頼んだぜ、リオス」

「ああ。」

よし、行くぞ、ワイズ」

『承知しました』

ポケットの中のワイズに声を掛けた後、俺はソウマがいると思われる場所へ向けて歩き出した。

教室を出てから数分後、俺達はソウマがいると思われる場所——騎竜部の部室や竜舎がある場所へと来ていた。

そして竜舎の中に入ってみると、そこにはネロの世話をしながら話をしているソウマの姿があった。

俺がソウマにゆっくりと近付くと、俺の姿に気付いたネロが大きな声で話し掛けてきた。

「おう、リオス！ お疲れさん！」

そしてその声によって、ソウマが俺達の方へ顔を向けた。

「やっぱりここにいたんだな、ソウマ」

「……リオスじゃないか。」

風に当たってくるって言ったのに、よく俺がここにいるって分かったな」

「時間的に昼だし、ソウマは真面目だから、風に当たってる時に、ネロの事を思い出して、世話をしに来るんじゃないかなと思っただ」

「……流石だな、その通りだよ。」

「そしたらネロが突然何か話でもしようって言い出してな、それでお前達が来るまで話をしていたんだよ」

「（なーんか辛気くせえ面してたからな、話してたら少しでも気分転換になると思っただけだ）」

「そうか……ありがとうな、ネロ」

「（おう！）」

ネロの頭に軽く手を置きながらお礼を言うソウマに、ネロは明るく返事をした。

（ネロは他人の感情の変化には敏感だから、やっぱり放っておけなかったんだろうな……）

さて、そろそろ本題に入るか）

そして俺はソウマに訊きたい事を訊くために話し掛けた。

「ソウマ、さつき言ってた普通の学園生活が分からないってどういう事なんだ？」
「……言葉の通りだけ、リオス。」

俺には……キャトラの言う普通の学園生活って奴が分からないんだ。

……前にいた学校の影響でな」

「前にいた学校……」

「(……そういや、ソウマからそういう話を聞いた覚えが無かったな)」

「まあ、話す機会も無かったからな。」

……せっかくだ、その学校について話をしよう」

そしてソウマは静かにその学校について話し始めた。

「俺は昔、ある学校にいた。その学校に名前なんて特に無かったが、俺達生徒はその学校の事を<スクール>と呼んでいた」

「<スクール>……」

「そしてそこは、スクールアーツっていう武術を教える学校だったんだ」

「(スクールアーツ……?) 聞いた事ねえ武術だな)」

「そうだろうな。俺も<スクール>以外でスクールアーツを使ってる奴は見たことが無いからな。」

それに……誰がどんなつもりであの学校を作ったのかも分からない。

そんな場所で俺は修行に明け暮れていた。スクールアーツの奥義を身に付けるため」
「スクールアーツの奥義、か……」

それで、それは身に付けられたのか？」

「いや……残念ながら俺はスクールアーツの奥義には到達できずに、そのまま退学した。
……つまり、今の俺には何も無いんだよ」

『何も無い、ですか……』

私も含め、皆さんがそうは思っていないと思います……』

「……そうか、ありがとうな、ワイズ。

でも……」

ソウマは辛そうな表情を浮かべながら話を続けた。

「……この連中はお前達を含めて何かと凄い奴らだろ？」

皆を見てたらさ、俺は苦勞してきたのに、こんなもんなのかって……アイツらの方が俺よりも凄いなだって、そう思ったらスツゴく空しくなっちゃったんだよ」

「ソウマ……」

（自分よりも他人の方が凄く感じる、か……）

まあ、俺も似たようなもんだな）

「ソウマ、そう思ってるのはお前だけじゃないぜ？」

「え……………」

「実は俺も時々感じるんだよ、俺よりも皆の方が凄いつてさ。」

ナギアは皆の力を引き出すのが上手いし、アイリスは魔法の使い方に長けてるし、キヤトラは皆をすぐに元気に出来る……

そして、今ここにはいないけど、俺よりも竜の事が好きで、竜と人の架け橋になるために頑張ってる奴とか竜と心を一つにして様々な問題に立ち向かえる人だつて知ってる。

そんな皆に比べたら、俺もちつぽけなんだなあつて時々感じるんだよ」

「リオス……………」

「…………でもさ、そうやって比べたり羨ましがったりしたところで、結局自分は自分なんだよな。」

誰かみたいになりたいって思ったところで、その『誰か』にはなれない、それに似た『自分』になるだけだ。

だつたらいつその事、自分が今持つてる手札、今の自分の力を使って、それを伸ばしていくことでその誰かに誇れる自分を目指した方が良い。

……まあ、ソウマの求めている答えとは違うかもしれないけど、俺はそうしようかなと思ってるよ」

「……そうか」

俺の言葉を聞くと、ソウマはフツと笑ってから言葉が続けた。

「なあ、リオス。ちよつと俺と勝負をしてみないか？」

「勝負……？ それは良いけど、何でだ？」

「お前の言葉を確かめてみたいのと、もう一つ……」

そしてソウマはニツと笑ってから言葉が続けた。

「部長対副部長って構図は、何だか面白そうだろ？」

「ソウマ……」

（俺の言葉を確かめてみたい、か……）

そういう事なら、この勝負受けないわけにはいかないよな……！）

俺はフツと笑った後、言葉が続けた。

「ああ、良いぜ。」

そしてその勝負、俺が絶対に勝ってやるよ！」

「よし。」

だが……直接やり合うのはこの学校らしくないよな。

ちよつと外まで来てくれ」

「わかった。ネロも一緒に来てくれるか？」

「おうよ！」

俺はソウマ達と一緒に竜舎の外に出た。

そして外に出ると、ソウマは辺りにいる不良星たぬき達を見ながらぼそつと呟いた。

「へえ……ちようど良いところにいるじゃねえか」

「……なるほど、そういう事か」

「ああ。アイツらを含めてこの辺りにいる奴らを多く倒した方が勝ちだ」

「わかった。」

さて……ネロ、出て来てもらったところ悪いんだが、今回は見ててくれるか？」

「へっ、しょうがねえ。男と男の勝負に水を差すわけには行かねえからな。」

リオス、ソウマ、どっちも頑張れよ？」

「ああ！」

「もちろんだ！」

俺達が返事をする、ポケットの中からワイズが声を掛けてきた。

『それでは、開始と終了の合図は私が務めます』

「ああ、頼んだぜ、ワイズ」

ワイズに返事をした後、俺は背中から「ソードオブマジア」を下ろした。

そして俺達は魔物達を見ながらギユツとそれぞれの武器を固く握った。

(さて……やってやるか！)

『それでは、3……2……1……スタートです！』

ワイズの声を合図に、俺達は魔物達に向かって走り出した。

『……そこまでです！』

ワイズの声を聞き、俺達は静かに武器を降ろした。

(ふう……だいぶ倒した気がするけど、何体倒したんだっけな……?)

最初は数を数えながら倒していたはずだが、途中から何故か倒すことがメインになってしまったせいか、何体倒したかが分からなくなってしまっていた。

(あはは……これはやっちゃったかな……)

少し苦笑いを浮かべながらソウマの方を見てみると、ソウマも何かをやってしまったというような様子で苦笑いを浮かべていた。

(あ……まさかこれは……)

「ソウマ、まさかお前も……」

「……って事は、リオスも……」

「ああ、何体倒したか全然覚えてない」

「くくく……だよな！」

「はははっ……ああ！」

その事が何故か無性に可笑しかった俺達は、周りに響くほど大きな声で笑い始めた。

（あーあ、勝負はお預けか……）

まあでも、なんだかんだで楽しかったし、これはこれで良い事にするか）

ひとしきり笑った後、ソウマは少しスッキリした様子で話し始めた。

「……正直に言うと、あの学校は俺の全てだったんだ。あの学校にいれば、俺は何も考えずにいられた。」

俺の人生を、〈スクール〉が決めてくれる。そう考えていたのさ」

「そうか……」

「ああ。」

でも、本当はそうじゃなかった。さっきのお前みたいな事を言えば、俺の人生を決めるのは俺自身。

俺が空っぽだったのは、俺の責任だったんだよ。

……まったく、お前も、アイツらも、学校の連中も自分で自分の人生を生きている。

本当に羨ましいことだ」

「……今からでもやってみたら良いんじゃないか？」

この学校でお前の思うような学校生活って奴をさ」

「……簡単に言ってくれるじゃないか。」

でも……それに挑戦してみるのも面白いかもしれないな」

「……だろ？」

「……ああ」

話をしながら俺達が笑い合っていたその時、ネロが俺達に近付いてきた。

「（お疲れさん、お前達）」

「ああ、ありがとうな、ネロ」

「ありがとう、ネロ」

「（へっ、礼なら俺よりもワイズに言ってやんな）」

「ははっ、それもそうだな。」

ワイズ、ありがとうな」

『いえいえ』

俺達で話をしていた時、ふと校舎の方を見てみると、俺達に向かってナギア達が走ってくるのが見えた。

そしてナギア達は俺達の近くで止まると、キャトラが心配そうな様子で話し掛けてき

た。

「……さつきこつちから戦闘の音が聞こえたけど、皆大丈夫だった？」

「ああ。俺達でちよつとした勝負をしてただけだからさ、それに皆怪我は無いから安心してくれ」

俺が微笑みながら言うと、ナギア達は安心した様子を見せた。

「そっか……」

実はリオスに任せした後、俺達でどうするべきか話し合ってたんだよ。

そしてその結果、俺達もやっぱり追い掛けようって事にして、敷地内を色々探してたら、突然こつちの方から炎とか雷の音が聞こえてさ……」

「あ……それ、完全に俺が出した音だな。」

勝負の最中、切るだけよりも魔法も使った方が効率的かなと思って、色々使ってたから」

「なるほどな……」

ナギアが納得したように言うと、キャトラが申し訳なさそうな様子でソウマに話し掛けた。

「……ソウマ、さつきはゴメンね。」

ソウマが気にしてる事言っちゃったみたいだったから……」

「いや、別に良いさ。

さっきのリオスとの勝負で少しだけスッキリ出来たからな。

それに……」

ソウマは俺達の事を見回すと、明るくニツと笑ってから言葉を続けた。

「お前達やここの連中を見てて思ったんだ。

俺だけのスクールアーツって奴をもう一度やってみたいってな」

「ソウマ……」

ははっ、すっかり元気になったみたいだな！」

「ああ、心配掛けたみたいだな、お前達」

「ううん、別に良いわよ。

だって、アタシ達は友達なんだから！」

「友達……ああ、そうだな。

何だかお前達となら、普通の学校生活、いや……楽しい学校生活って奴が送れそうな

気がしてきたぜ」

「ふっふっふ……気がする、じゃなく。

絶対に送らせてみせるわよ、覚悟なさい！」

「ああ、望むところだ！」

キャトラに返事をするソウマの顔には、さっきまでの不安などは無く、これからの期待などに満ち溢れているように見えた。

(さて……そろそろ俺達も昼食にしないとな)

そして俺は皆に声を掛けた。

「よし……皆、そろそろ俺達も昼食にしようぜ。」

そうじゃないと、時間が無くなりそうだからさ」

「……つと、それもそうだな。」

今から行けば、まだまだゆっくり食べられそうだし、ちやちやつと行っちゃうか」

「ああ、そうだな」

ナギアの言葉に返事をした後、俺はネロの方へと体を向けた。

「それじゃあ、ネロ。また放課後にな」

「おう！

お前達、午後の授業も頑張れよ？」

「ああ、もちろんだ」

「ははっ、だな」

「ええ」

「そうね」

「そうだな」

俺達の返事を聞くと、ネロは満足げにうんうんと頷き、

「(そんなじゃなく、お前達)」

静かに竜舎に向けて歩いていった。

(さて……俺達もそろそろ行くか)

「よし、それじゃあ行くこうぜ、皆」

「おう！」

「うん！」

「オツケー！」

「ああ！」

そして俺達は、道々色々な話をしながら、食堂へ向けて歩き始めた。

その頃、保健室では教室で倒れたミラが目を覚まし、ゆっくりと目を開けていた。
「うっ」

開いた目に射し込んでくる光に少しの眩しさを感じつつ、ミラは体をゆっくりと起こした。

そしてミラは何かを探すように周りを見回していたが、目当ての物―ノートを見つけると、ノートに手を伸ばしながら譫言うわごとのようにある言葉を繰り返し口にした。

「……勉強……」

勉強……」

そしてノートを手にとると、ミラは何かに取り憑かれたような目で大きな声を上げた。

「大豆、小豆、エンドウ豆、緑豆――」

こうしちゃいられないわ！」

そしてミラはノートを広げ、一心不乱に勉強をし始めた。